



University of Pennsylvania
ScholarlyCommons

Department of East Asian Languages and
Civilizations

School of Arts and Sciences


7-2014

30年前のブログ

Cecilia S. Seigle Ph.D.

University of Pennsylvania, cseigle@sas.upenn.edu

Follow this and additional works at: <https://repository.upenn.edu/ealc>

 Part of the [Japanese Studies Commons](#), and the [Social and Behavioral Sciences Commons](#)

Recommended Citation

Seigle, Cecilia S. Ph.D., "30年前のブログ" (2014). *Department of East Asian Languages and Civilizations*.
5.

<https://repository.upenn.edu/ealc/5>

This paper is posted at ScholarlyCommons. <https://repository.upenn.edu/ealc/5>
For more information, please contact repository@pobox.upenn.edu.

30年前のブログ

Abstract

I was in Japan for one year (1985-1986) on the research grant of the Japan Foundation while writing my book Yoshiwara and subsequent book Ooku. Recently I found a collection of my brief observations and comments on various aspects of Japanese life. I had come to the United States as a college freshman in 1953, and although I had gone back to Japan for brief visits and research since then, I had not lived there over a couple of months. My comments in 1985-86 are interesting because of the passage of time since then. It is also light-hearted and humorous although points I attempted to make are serious. Since I never published these essays, I would like to publish them with added observations and comments from 2014. Although blogs as such did not exist in 1985-86, I would like to call the essays "Blogs of 30 years ago."

Keywords

Japanese society, 1985-86

Disciplines

Arts and Humanities | East Asian Languages and Societies | Japanese Studies | Social and Behavioral Sciences

30年前のブログ

Cecilia Segawa Seigle (瀬川淑子)、University of Pennsylvania

2014年：

この年になると、昨日まで元気だった知人が急に亡くなったという噂がしげくなる。そういう私もいつ成仏するかわからない。そうなれば身近に山積しているガラクタを残して行くのは何とも恥ずかしい。なんとか整理をしなければならぬ、ということで、ガラクタ箱の研究ノートを選び分け始めた。すると思いがけなくすっかり忘れていた29年前の独り言が出て来た。

この何十年間毎夏日本を訪れていたが、その間二度ほど国際交流資金の研究費をいただいで一年間滞日したことがある。この独り言はたしかその始めのとき、1985-86年間にぼつりぼつりと書いた物で、多くはない。その時は東京に住処が必要になって、二人の姉が世田谷三軒茶屋に女子学生の止宿する恰好のアパートを見つけてくれた。プロテスタントの教会の持ち物で、建ってから長くはなく、空室があったので、学生ではないオバンの私でも入れて下さるといふ有り難いお話だったので喜んで申し込んだ。国会図書館や公文書館や東大の史料編纂所へ行かない時、その部屋でときどき無駄口を書いていた。

そのころはまだ、e-mailもブログもFacebookもtwitterもなかったと思う。インターネットなんてものは存在したかもしれないが、私は知らなかっただろう。しかしこの独り言はブログと同じような目的と形式で書いている。30年近くの間世界ががらりと変わってしまったので今の人間の感覚ではない。その頃の日本人とも違う。アメリカから日本に逆留学した女はこんな風だったのか、と驚いた。全然覚えていないのである。それで改めてインターネットで発表させていただくことにした。

=====

2014年7月17日

今朝のニューヨークタイムスの見出しに

What's Worse Than the L.I.R.R.? Not Having It

By BENJAMIN MUELLER

As a strike deadline loomed, riders on the Long Island Rail Road weighed onerous contingency plans. They love their train; they hate their train. But they certainly don't want to do without it.

というのがあった。Long Island Rail Road はマンハッタンとロングアイランドの間を走っているローカル線で、ニューヨーク人はこの線が大嫌いだそうである——けれどもなくてはならない線なのである。

電車のことではないけれども、なんとなくそれと似たような感想を私は1985年に書いている。古めかしい電話の話である。今の私は電話が大嫌いでめったにかけないし、携帯電話も持ってはいるがほとんど使わない。ふつうの地上電話も、口べたなのでなるべくさけて、用事や友達親類との通信はみんなメールですませてしまう。かかって来ても人物の認知ができなければ返事をしないことが多い。電話をかけてくるのは何か売ろうという連中と寄付を頼む団体ばかりである。寄付はちゃんと長いリストがあって一年に一度はあげているからその上電話で要求されるのは迷惑である。うかうかと返事すると私はどうしても寄付する約束をしてしまって二重献金になるから。電話は人に寄付するためにあるものではない。けれど30年前の無駄書きを読むと一ちっとも思いつけないが一その頃は私はまだ愛想がよかったらしい。

以下、表題のあるものはぜんぶ1985年か86年に書いたものである。

=====

1985年：『電話、あってもなくても困るもの』

電話がないということは、人間が存在しないということだ。そんなバカなことを少なくとも今の私は腹立たしさのあまり感じている。電話局の人が、一度は電話をつけに来てくれたのだけれど、黒のかわりに象牙色のをたのんだら、待たされることになった。

電話がつかない一週間、「静かでいいわ」などと、なるべく優雅で寛大な気持ちでいようと思うけれど、なんと不便なことだろうという思いが先立つ。普段そんなに依存しているつもりでもない電話の重要さをひしひしと思い知らされる。それは電車だって、水だって、電気だって、途切れれば困るのだから何も珍しい発見ではない。しかし電話の場合不便以上の欠乏感がある。電話そのものはちっとも重要ではない。コミュニケーションの方法として手紙や電報があるし、いざとなれば相手のところへかけつけてもいい。けれどパジャマのままでも対応できる人間の声、人の顔を見なくても改まらなくても向きあえる声、ラジオのように一般聴衆の不定数に対する声じゃなくて、自分一人と対応してくれる声のいつの間にか大事になっていることに気付く。

私はわりと筆まめに手紙を書くほうだし、電話の長話はちっとも好きではない。それでもこの間から日本に来ていて、いろんな人に『また来ましたよ。今度は長いのよ』と知らせておきたい。公衆電話がないわけではなく、この階の廊下の一つついている。けれども二三人にそれでかけたあとで恥ずかしくなった。廊下には修道院の個室のようなアパートが両側にしんと並んでいて、十八から二十二くらいの女性が住んでいる。彼女らが聞き耳を立ててはいないとしても、私のような舎監くらいの年頃のおぼんが公衆電話でガアガア声を立てるのは気おくれがする。しんみりといろんな事情を説明したい友人たちと廊下で話し込むのはなおさら恰好が悪い。

外の公衆電話はどうかというと、それは戦場まっただ中の通信班の連絡みたいで、ガアッ、ワヤワヤ、ブウッ、ゴッ、ギャッという騒ぎ。公衆電話は東京中一番喧

噪な所ばかりに設置してある。又話していると、後ろにけわしい表情をした人が次々に並び始める。時計を見ながら舌打ちし、小銭をジャラジャラ言わせたり、テレホンカードをパチパチはじいたりする。

複数の電話が並んでいる所では待つ人の列はできないが、ガラス戸も何もないので、隣の男がこちらに肘を突き出して、

『そんなこというなようー、オレ困ってんじゃねえかよう』などと口説くので私の相手に聞こえはしないかとハラハラする。

自然、まあ電話がつくまで XX さんにはかけずにおきましょう、ということになる。そうすれば XX さんにとって私は日本に存在しないと同然なのである。

メーテルリンクの『青い鳥』の、生きている人たちが思い出してくれた時だけ死んだ人たちが存在できるのだ、という説に似た状態が今の世の中にもあるようだ。しかし実際問題として、友人や家族を思い出したり電話したり手紙を書いたりするのはフルタイムの仕事で、容易ではない。

まあ、今の私は勉強に来たのだから誰にとっても存在しない方がいいだろう。こう思ってあきらめて待つことにする。

一週間ばかりすると下の教会の牧師夫人につきそわれて電話の工事の人がやって来た。奥さんはすぐ帰っていったが、新しい建物の電話なのでちょっと手がこんでいた。壁の中から床下にかけて、配管の中にコードを通す作業らしいのだが、それが途中でひっかかったかして動かなくなり、工夫さんが蒼くなった。彼は私の協力を頼んで廊下の端の元線のところでいろいろ何やら動かしてこちらの反応を何十分かしらべたあげく、やっと線を通して電話をつなぐのに成功した。

『こいつが途中で切れたりするとたいへんなことになるどころでした』と彼は胸を撫でおろすようにいった。

『もし切れたらどうなさいました？』

『そりゃ床から何から皆ひっぺがして大工事ですね。』

工夫さんは今にも全部ひっぺがしそうな動作をしていった。

『んまあ！』

私は普通に電話がつながったよりも二倍くらいありがたくて最敬礼でお礼をいった。

けれども電話はそのあと何度も不通になったり、混線して誰かが話の最中に飛び込んで来たり、あるいは私が誰かの話を混ぜっ返すことになったり、というような不都合が何度かあり、私は何度も 103 番に抗議したり電話局まで脚をはこんだりした。

腹を立ててついに電話に向かって

『世田谷電話はボロデンワ！！』とどなることもあった。その効果があったのかこの頃になってやっと何とか当たり前に通話できるようになった。

夜中の二時頃電話がかかって来た。

『夜分おそく失礼ですが、今、なま放送の最中なんですけど質問に答えてくださったら記念品をお送りします』と男の声がいう。

私はねぼけてはいるが生放送というのと記念品というのを聞き逃しはしない。『はい』とっておき上がる。

『失礼ですがお名前とお年をいってください。』

『XX で XXXX と申します』私はバカ正直に答える。世の中の80%の女性はおなじく生放送とか、プレゼントという言葉に弱いのではないかと思う。アメリカならそんなことに見向きもしない私も、ヘンなもので日本だと何だか様子がちがって有り難く思えるのである。

『ところで今生放送で統計を取っているんですがね、今寝てるのはお一人ですか？誰かと一緒にですか？』

『一人でございます。』

『御主人とかボーイフレンドいないんですか？』

男の口調がだんだんぞんざいになる。

『おりません。』

『なぜですか？なま放送の皆さんに答えてほしいんですが本当に誰もいないんですか？記念品を送りますから。』

何だかおかしいぞと思い始める。生放送や記念品をなぜそんなに強調しなければならぬんだ？

『私は未亡人ですから。』

『未亡人でもセックスしないということないでしょう。ほしいを思いませんか？』この嫌らしい質問には腹が立った。

『そんなこと、あなたと関係ないでしょう。』

『しかしこれは生放送でーほんとにそこに誰もいないんですか？一緒に寝てるんじゃないんですか。あなたほしくなったときどうやって解決してるんですか？』

私はかっかとなった。『そんなことに興味ないんです。もう十分お答えしたからよろしいでしょう。さようなら！』私はせいいっぱいガチャンと切った。

その後でもっともっと腹が立って来て、ついには怒り心頭を発するという状態になった。何よりもバカ正直に答えたこと、そしてもっとひどいことをいってやらなかったのが悔しかった。

『バッキヤロー、みんながみんなてめえのような色キチじゃねえんだぞっ！』とでもいってやればよかった。

世の中には暇な男もいるものだ。これは多分毎晩いたずら電話をしている男か、さもなくば場末の小さいローカル局の深夜放送でつまらない電話を実際に流して喜んでいゝアナかもしれない。電話の返事をしたばかりに夜中に叩き起こされてこんな腹のたつ思いをさせられる羽目になった。

アメリカにも女の名前で電話帳に名が出ているとよくいたずら電話がかかってくるというが、私は二三度しか受けたことはない。いずれも中学生くらいの子供のいたずらである。一度は大人で悪質だったからものもいわずにガチャンと切った後、こっぴどいことを言ってやらなかったのを悔しがった。しかし何と言えどスーッとするか皆目分

からない。又「今度はこうやってやろう」などと考えていてもすぐに忘れてしまう。いたずら電話を待ちかまえているわけではないのだから。

今度かかって来たら相手に思いっきりワイセツなことを言って閉口させてやろうと思うのだが。

『あなた今ひとりですか？』

『いいえ、全部で六人。』

『おっ、これは面白い。パーティですか？』

『ええ、乱交パーティよ。男四人に女二人。あんたも来ない？』

『行きたいですね。どんなことしてるんですか？』

『あのね、みんなのお尻のアナの直径を測ってるの。太郎ちゃんのが一番大きくて花子ちゃんのが一番小さいって今わかったの、太郎ちゃんにブルーリボン賞をあげようとしたんだけど、花子ちゃんがあたしは二穴だから合計すれば同じことだと言ったので、穴の話になればミミも口も鼻もぜんぶ合計しなければならないってことになって、そうするとやっぱり太郎ちゃんか次郎ちゃんが一番大きそうなの。なんしろ太郎ちゃんの口は... それはそうとあんたのおへそからお尻の穴まで何センチあるの？』

というようなことを黒柳徹子さんみたいになてつづけに息もつかせずに言えたらこちらの勝ちである。ところが私はハイもイイエもろくに出て来ないほどの口べたである。明日にもワイセツ電話がかかって来たら私はものも言えずに湯気をたてて怒るにきまっている。なさないことである。

(2014年: 昔から口べたなのが、教職をやめて14年になるとますますものが云えなくなった。だから電話が大嫌いなのである。だいぶ前の夏、日本に行っていて、友人の家のパーティに招かれた。何人か雄弁なおばさんたちが来ていて、大おしゃべりが花火のような勢いであちこちはじけていたが、そのうちにさち子さんが私のことをアメリカから来ている人だと言った。すると一人の象のようなおぼんが、

『ああ、そうなの？それで... わたしはまた言語障害のある方かと思った。』

云うにも言いようがあるというのはこのことだ。そんなことは思っただけでも口に出さないのがふつうではないだろうか。親しい友達ならともかく、始めて会った人物である。今の日本人は思っていることをちゃんと口に出すようになって大変いいことだとは思っているのだが、初めて会った友人の友達にそんな失礼なことをいうのがいいことだと言えるだろうか。私がますますパーティやお集りが嫌いになったのは当然である。

私の口が重いのは、家系と、友人の道子さんと、清少納言のせいである。家系と言ったら大げさだが、どういうものか私の家族親類には口べたな人が多い。そうして私が子供の時、母が早口おしゃべりは品が悪い、とたしなめたのが身にしみていた。そうして、子供の時から仲良しだった道子さんは毛利家に関係のある人だったが、実にゆっくりあどけない口をきく人で、とても可愛らしくて上品なので、何となくそのまねをするようになったということもある。清少納言が早口で一人でしゃべりまくり、笑う女が大嫌いだった様子はあちこちに見えたのを覚えているが、そういうさまざまな理由で大声や早口で話すのを避けているうちに、だんだんものが言えなくなったらしい。

話す事だけではなく、私は聞く事も下手になってきた。現代の若い人たちはどこの国でもものすごく早口で話す。私のような者には電車の中やレストランで聞こえて来る言葉の内容がだんだんわからなくなって来た。それは私の耳が遠くなった事もあるのだがそれだけではない。若い男女の会話はラジオやテレビのアナウンサーの標準語とだいぶ違って来たのである。アナウンサーでも模範的な標準語を話す人は少ないというが、とにかく、今の若い人たちは内容もスピードも、火星から来たのではないかと思うような会話をしているので私はもうあきらめるしかない。)

=====

1985年：『花のいのち』

人がよくヘンな顔をして私を見る。銀行でお金を出すのにマゴマゴしていたり、毎月払い落としの方法がわからなかったり、人に道をきかれて、

『この辺りはよく存じませんからあそこの交番できいて下さい』なんて、平然と世田谷駅の改札口に座っている人を指したりする。これは世田谷線というかわいらしい線が三軒茶屋の交差点の、交番なぞがあるべき角にあり、駅員氏がおまわりとまぎらわしい服装をしているからいけないんだ！

今日も又二三人が変な顔をして私をみた。その次第は...

今朝小さい虫をアパートの中でみつけた。目の前に飛んで来たのである。私は蚊とか蠅とかが大きらいだから、そういう生物に関する限り、日頃の平和人道主義を忘れて体中の殺人本能を発動させて殺しにかかる。ところが今朝から手あたり次第にもう十匹も殺したのに、又その一ミリくらいの小さなヤツがふわりと机の上におりて来る。ついに緑台の姉に電話して、この新築アパートに、もう虫が湧いた！とわめく。彼女は落ち着いて、まさか、と言い、この間のアネモネか何かについて来たのでしょうか。キンチオールか何か買って撒いたらどう、という。駆逐剤なら何でもいいそうだが、キンチオールという名は覚えがあるからそれにしようとかやみくもに走り出てキンチオール捜索にあたる。が私はあわてた時は判断力を失うというたぐいまれな欠点を持っている。キンチオールなんてどこへいったらあるのかわからない。クリーニング屋ではない、雑貨屋にもなさそうだ、食物店にはもちろんない。化粧品屋が見えたから入って行って、

『あの、キンチオールがありますかしら』というと、てかてかにお化粧をした中年女が変な顔をして、

『ここは化粧品屋だから隣の薬局へ行ってください』といった。

ああっ、そうか、なるほど、隣にたしかに薬屋があるよ、とその方へ行くと、「家へ来てキンチオールをさがしたバカはどんな顔をしているのか」と化粧品屋の若い女がクスクス笑いながらわざわざ見に来た。

(だってそういうものはすべてドラッグストアで売ってるんですよ。なにも化粧品と薬をごたいそうに分業にしなくてもいいでしょう。たとえばこの頃は何でもスーパーで....) あっそうだ、始めからスーパーへいけばよかったんだ。そうしたら恥をかかなくてすんだのに。

殺虫剤を買って満足して花屋のそばを通ると美しい花を売っていた。全く見事な紫ビロードのグロキシニアの鉢である。思わず買ってしまう。

『あの、これ、キンチオールかけてもいいでしょうか。』

『何でキンチオールかけるんですか。花が死んでしまいますよ。』

あらまたしくじった。私は花を持って早々に店を出た。どこやらトンチンカンなところがあるらしい。「花から虫が出て来ないでしょうか」ときけばよかった。

家へ帰って赤い花黄色い花の鉢の根元のあたりにうんと薬を吹き付けたらまさしく虫がぞろぞろはい出して来てみんな死んでしまった。ユカイユカイ。

ところが二日たったらアネモネの花も茎も病気になった。花屋の言った通りである。花は避けて土だけにかけてたつもりだったのに。

私とお花の関係はあまりよく行かないようである。ご縁がないというのかしらん。毎年日本とどこかへ二回は旅行するのでフィラデルフィアの友達に鉢植えを預けていくのだが、長年まだ生き残っているのは、二三週水をやらなくても、金槌でぶっ叩いても死なないくらい頑強なドラセナやクリビヤやファイカスだけである。それさえも私が帰ってくる迄に、生まれ変わったように生き生きとつややかになるのは、何ともあてつけがましい。それまで私がいかに虐待していたように見えるけれど、私にもやさしい心はあるからたまにはお大事にお扱い申し上げているのである。

特に突発的にお花が欲しくなって買ったり、また、奇特定の男性たちから美しい盛花のバスケットが届けられたときには一（お花を贈ってくれるのはだいたい男性である。それもロマンチックな下心からではなくて、何かの御礼というつや消しの理由で）さすがに嬉しくて大事にお世話申し上げる一にもかかわらず、フィラデルフィアの空気は乾いているから二三日中に逝去なさる。霧を吹きかけて差し上げたり、水を注いだり、栄養剤をおすすめしたりするのに、さっさとお亡くなりになる。

この間姉から貰った赤いアネモネは私が情け容赦もなくキンチオールを吹き付けたのであえなくも... おかくれになりはしないが葉っぱがことごとく変色して、まるでライ病に感染したとでもいうような... 黄色い方は禿頭病におかかりになった。

又、紫あでやかなグロキシニア式部は花屋の警告にもかかわらず私の細心の心遣いから、キンチオールを（土にだけだが）吹き付けて差し上げたので、葉の一部に老人斑をお出しになった。私も心をいためて日光浴をバルコニーでおすすめしたのだが、まもなく四つ首を垂れておしまいになり、さらに二日ほどの手厚い看護のかいもなく、あえない最後をおとげになった。四つも首があれば最後は壮絶というよりほかない。

『一ヶ月くらい花は咲き続けますよ』と花屋さんが言ったのに、おいたわしいことである。ほんとに私という人間はハズバンドと花にはご縁がないのだと思うしかない。

ライ病におかかりになった花のほうは、お気の毒ながらどこかに押し込め奉るか、清掃車で葬送もうしあげようと思っている。

思えば花にふさわしいはかない御生涯であった。

(2014年:

アパートの空気は乾いていて花がもたないのでたまにしか買わないが、ときどき立派なお花をいただく。今年は十二月に誕生日と四月に本の出版祝い、ということで美術館から実に立派な生花の器をいただいた。これは大事にしなければ、と毎日霧をふきつけたのでしばらく持ったが、一週間も持つことは絶対にならない。昔は立派な花をいただくと写真を撮ったりしたが今はめんどうなのでそんなことはしない。

私の住んでいるコーポには前と横に庭があって、それぞれいつもきれいな花が咲いている。以前、前庭に立派な白樺が三、四本あったのだが腐って抜かれてしまった。今は山リンゴが何本かとサルスベリが植えてある。隣の建物の壁際には常緑樹の灌木がエスパリエーのような感じで植えてあり、花壇にはいつもいろんな花が咲き乱れている。今は夏なので赤いサルスベリがみごとで、草花はスーパーチュニヤかなにか。

五月ごろには毎年チューリップがみごとである。私はいつも日本の『チューリップ兵隊...』の童謡を思いだす。しかしまだまだ鑑賞に堪える頃庭師が来てさっさと花を植え替えてしまう。ああ、惜しい、まだあんなにきれいなのに.. . . と残念に思うことが多い。

このコーポは経営が上手で毎月の費用もたくみに押さえているのだが、花にだけは惜しみなく維持費をつかっているらしい。庭だけでなく、ひろいロビーの真ん中にはいつも大きいみごとな生花が飾ってある。とくに蘭の花はいろんな種類のがいつも大鉢に生けてある。造花じゃないかしら、と思うほど完全に美しいのでときどき立ち止まって眺めてからアパートへ帰る。そうすると家の中に花がなくても淋しくない。)

=====

1985年：『ラジオ体操』

このへんなおばんはこのところ毎朝ラジオ体操をする。もっともわがラジオ体操と称するものは変形炭坑節みたいで何をやっているのか他人にはわからないだろうと思う。むろん自分でもかいもくわからない。太古の戦争時代、まだ国民学校というところへ通っている時代にはよくラジオ体操というものをやらされた。朝そのために早く学校へ行き、夏休みの間もわざわざ体操の為にだけ学校へ行ったような気がする。第一と第二というのがあったのだが、そのやり方も順序も覚えてはいない。

ラジオではなくテレビならば見よう見真似でできるので、これまでの夏に日本に来た時、ときどき早起きしてテレビを見ながらやったことが何度かある。けれどもその場限りだからどんな体操だったかちっとも覚えていない。今の学生アパートにはテレビはなく、私も一年間だけのためにテレビを買ったりしない。

今までテレビ体操を見た時の印象はきれいな色のレオタードを着た発育のいい三人の女性がのびのびと体を動かして大分現代的であった。

ラジオの方では六時半に体操のおじさんが出て来ていやになるほど元気ハツラツたる声で、

『全国ノミナサン！オハヨーゴザイマス！サア、今朝モゲンキイッパイニ体操イタシマショー！』てなことを言う。

これはもう真四角な顔しか想像できない昔風の、戦時中の雰囲気である。

私はそんなにハッパをかけられても、五時頃から起きているから六時半にタイソーをすれば元気いっぱいどころか、ぐったりしてもう一日中寝込む正当な理由ができるのである。

年齢は体操をしない理由にはならない。現にフィラ市の友達に七十歳なのに五十くらいにしか見えず、毎朝二十分の美容体操を欠かさない夫人がいる。この人はアルベルト ジャコメッテイの彫刻のように痩せている。体操も効果があるのだろうが、彼女はそもそも食べる量が少ないのである。

日本の公園などに集まって体操をやっている人たちにも高齢者が多いのをテレビでときどき見る。中国のあちこちの都会でも年取った人々が朝靄のなかで若い人々にまじって身体を動かしていた。私よりも相当年上の年配の人たちが。

それを思うと私は比較的まだ若いのだから克己鞭勵してラジオ大将の号令に従って体操をしなければ、と思う。ただラジオ体操を知らないからいい加減めちやくちやに体操神経のおもむくままに身体を動かすことになる。

日本全国あらゆるところでラジオやテレビをつけて、同時に同じ体操をやっているのであろうが、私のアパートだけは調和を欠く。といってもイサドラダンカンみたいにシートを持って飛び跳ねているのではなくて、一応はオジさんの申されることをきいているのである。

『ヒザノウンドーッ！手ヲヒザニアテテニ回マゲテノバスーッ』くらいのことは想像がつくけれど、『手足ノ運動オーッ』といわれても何をやっていいかわからない。だから手を振り脚を曲げて田吾作のエアロビクスか泥鰌すくいの恰好になる。

七分かそこらのプログラムでラジオ体操第一第二、その中間で首まわしの運動をする。えらいもんである。

グループ体操のさかんな中国でやっている朝の体操はシャドウボクシングや太極拳というもので、それぞれ思い思いの速度で身体をうごかしているようだ。たまたま同じ広場や川端に出て来たという風で、集まってはいても同じ動作をしているわけではないのである。みんな自分だけの世界に引きこもって没頭している。

日本人だけがいやに張り切って全国で同時にただ一人の号令一下同じ体操をしているのである。もし anthropomorphic な（人間化した）神様という存在がほんとうにあって、天上のような所からごらんになっているとしたらさぞ面白いことだろう。その中で三軒茶屋の押し入れのような小さなアパートで同じ音楽に合わせて一人だけ変なダンスをしているおぼんはさぞ目ざわりなことだろう。

ラジオ体操はいつ頃できたものか、とにかく戦前の支配権力に対する恭順性がよくあらわれている。しかし今では全体主義がどうのこうのというのではなく、これも日本の合理性の現れなのである。どうせ運動するなら一つのパターンを作ってそれに従い、ラジオやテレビでやって見せれば全国の人々がその恩恵をうける。交通情報や天気予報や洗濯指数（私はこれをきいて日本ラジオの公衆へのサービスの徹底にびっくりしている）と同じ電波のサービス項目なのである。ただそれを利用する人が非常に多いということと、全国放送だという所がアメリカのテレビのエアロビクスなどと違っている。そこらが他の人と同じことをすることに少しも抵抗を感じない日本人と、号令一下同じ行動をすることの嫌いな欧米人や中国人の違いだろうか。合理的で実用的であるだけでなく従順なのである。

けれどもたった一人で確固たる意思をもってあることをするというのは非常にむずかしいことである。号令でもなんでも、あなたまかせで人に引率されてやっていけば楽でいい。旗を持ったツアーガイドの後ろからゾロゾロついて行ってちっとも抵抗を感じないのは、見た所日本人が一番多いらしい。それがいいか悪いかの評はあたらぬ。

とにかくいいことは、全国に普及するラジオ体操の習慣のおかげで（少なくともそれが一つの理由となって）日本人の平均寿命はだんだん高くなるようだ。

アメリカ人のエアロビクスといえば、何年前かにジェーン フォンダがああすてきなスタイルで体操をはやらせてからストレッチ運動はものすごい勢いでアメリカに蔓延した。それだけでなくもう健康食とか体調とか体重とかアメリカ中の人々がだんだん健康問題に神経質になりかけていた頃なので時の利を得ていた。

初めてそのビデオを見たのはずいぶん前のことである。感謝祭食事のパーティーに例年行くことになっている友人の家で、その家の主人を始め男ばかり七八人ゲームルームのテレビの前で熱心に何やら見ている。それがジェーンフォンダの **workout** のビデオだったのである。私も彼女は大好きだし、一度反ベトナム戦パーティーで会ったことがあるので、特別興味をもってはじっこで眺め始めた。そこにいるのは皆医者だったから、プロの見地から体操の健康に及ぼす効用というものを検討しているのかと思ったら、

『うーん、なかなかいかすねえ！』

『ブルーフィルムよりよっぽどセクシーだ。』

『こんなビデオをよく堂々と売らせるもんだね。これはすごいスリーパーだ。』

などと口々に言っている。中にはものもいわずに目を光らせて食い入るように見ている人もいる。カセットが売れるはずである。

その頃からエアロビクスがアメリカ中の大事業になっていろんな女性が流行に乗り、あちこちで練習場を開いた。日本でも毎年来る度に練習場がふえていたが今年はなぜか電車の中で広告をあまり見かけない。テレビではまだやっているようだが、めまぐるしく流行の変わる日本のことで、もうそろそろ下火なのだろうか。

フィラデルフィアの私のコーポの建物でも住人の三十五歳のぴちぴちした女性が先生になってクラスが開かれているので、私も今年まで一週に一時間ずつ通っていた。ク

ラスの平均年齢は六十五歳くらいだから私など一番若い一人である。この先生は脚を百八十度を開いて、背をまっすぐに伸ばしたまま二つに折って顔を床にくっつけるのを特技とする。彼女のいい所はそれをオバンたちに強要しないことだ。

こうして私はたのしみにクラスに出ていたのだが、どこかへ旅行して帰って来るたびに再びクラスにでると身体はメリメリいい、息が切れる、気が遠くなる。それにもめげず二三年続けたのだけれども、とうとう今年一月にロンドンから大風邪をひいて帰って来てからおっくうになり、一ト月二タ月休むと今度ばかりは出る気がしなくなった。

クラスの二十人ばかりの実年群はそれぞれリッパな信念にそって体操をしている。私など健康管理の信念なんてクスリにしたいともないから、一度おっくうになるともう敗北である。それからの半年の怠慢の間、身体はちょっと動かすとメリメリバリバリというようになった。首など一度まわすとぎくっといって古いビスク人形の首のよう。もう元へもどらないのではないかとこわくなった。そろそろとやらなくてはならない、そろそろと。ずいぶん前だけれど、フィラオケのピアニストの清子さんの妹の信ちゃんが私に言ったことがある。『人間一日に一度は首をぐるりとまわす運動をしなきゃだめよ。』私はそれからなるべく忘れないように首の運動をしようと思ったのだけれどなかなか続かない。これをするとなぜか淡路の人形芝居の首を思ってしまう。

日本へ来てから反省して、歯をくいしばってでも体操をやらなければ、と、毎日たった七分ほど、この三週間ほど続けていると、メリメリいわなくなったからたいしたものである。オバンのどじょう掬いでもしないよりはましらしい。

ジェーン フォンダの **Workout** のデモをして友人の医者グループにご覧に入れられないのは非常に残念だが、脚の短い中年のおぼんが、万が一あの体操を全部 できたとしても、オトコたちは絶対に見てはくれないのである。

(2014年：

こんなに年を取ってしまうと、若い頃に何とも思わないで乱用した時間が惜しくてならない。どうして時間をもっと大切に使わなかったか、なぜもっと意義ある事に集中しなかったか——30年前はすでに決して若やかではなかったのだが、まだまだできたことがたくさんあったのに、と私は毎日悔やんでいる。

今でもやっているただ一つの意義のある事と言えば、毎朝体操をすることである。2005年に急に左肩から腕が動かなくなり、首もまわらなくなった。それで医者に行き、レントゲンを撮ってもらおうと、別に珍しい徴候でもない、年寄りの大部分が苦しむ脊椎から来る痛みだからPT(身体療法)に通うように、と言われた。PTは医者ではなくその専門の資格を持った人がやってくれるのだが、まず物理療法の医学博士から診断書をもってPTの所へいかなければならない。その手つづきをしてその年に二ヶ月あまり通った。それからハワイと日本へ行ったが、その間も自分で体操を続けているとすっかりよくなった。

それからというもの、私のPT療法にたいする信頼はすっかり高くなって、2007年に座骨神経痛が出て来た時もすぐさま診断書をもってPT治療所へいったのである。しかし2年前に治療を受け持ってくれた人がいなくなっていて、違う人では始めのような効果がないことがわかった。だからこういう治療法でも個人の才能と技術でずいぶん差があるのだと知った。

それから私の住むアパートのビルの一階にも同じような治療所があるのを知ってそこへ行き始めた。毎日通っているうちに、これはわざわざここへ来なくても、方法と順序を覚えれば自分で出来ることだと気がついた。保険が利くので治療費は払わなくてもいいのだが、その度に服を着替えて下までおりて行って、えっちらおっちら体操するのは面倒くさいのである。それで自分のアパートで毎朝起き抜けにパジャマのままPTの体操手順を繰り返すことに決め、それ以来一日も怠けずにやっている。旅行中にもホテルや親類の家でそれを続けているのである。

だらしない私にしては珍しいことだと思うが、実際問題として、朝起きると背中が痛くて、まっすぐ立って歩けないくらいなのだ。それが体操をすると何とかふつうに歩け、行動できるようになる。しかしその後あまり歩かないで一日中コンピューターの前に座っている時間が多いから、立つと背中が痛くてまっすぐ立てないこともある。それでまた少し体操をするとなんとかなる。決まってきちんとやってることと言えば、その体操と、眼が非常にわるいから毎日その治療だけである。治療といたらおおげさだけれども三つの違う目薬を差して、一日二回、5分間の温湿布治療をするのである。

それらは全く自分に必要なことだけで、世の中のため人の為には一文の役にも立たない。そうして自己向上とさえいえない。恥じずにはいられない。)

=====

1986年：『庭園美術館』および『MOA』

この一年の間に美術館や庭園歩きはよくしたけれど、思いがけない発見に感激したのは、目黒の庭園美術館である。

今年五月のある日、季節が来たから堀切の菖蒲園へ行こうと思い、ねんのために電話してみた。すると菖蒲は七月初めにならないと駄目ということだった。考えてみると旧の菖蒲の節句は今の七月頃になるのだから当然である。友人の礼子さんを誘ってしまっていたので、とにかく目黒の自然公園へでも行ってみようと提案すると、その辺に「庭園美術館」というのがあるそうだった。

庭と美術館を両方見るというようなのが大好きな人間のことで（アメリカでもそういう所がいくつかある）大喜びで早速でかけた。

庭園美術館の入り口に「アントニオ クラーベ展」とある。アメリカではクラヴェーと行っているスペイン人である。森の中の砂利道を伝って行くと、広い車寄せの前に出た。東京にまだこんな家があるのかと驚くような白亜の大邸宅である。前田邸だっ

た駒場近代文学館よりもまだ大きく、瀟洒で庭も手入れがゆきとどいている。桜の頃はさぞ見事だろうと思われる大木が四方に枝を張り出している。

車寄せを回って玄関から一步はいると私はあっと立ち止まった。端麗なルネー ラリークのレリーフの女神の彫像が四体、モザイクの石畳の上の壁から前のめりに浮き出ている。新しい複製か、としげしげ眺めたけれど、真正のラリーク作品のようである。すごいものがある、とうなりながら入って行くと、展覧会の絵よりもまず、このシンプルで威厳のある屋敷がアールデコで統一された世にも珍しい建物なのに気がついた。

そうなるともうクラヴェーのピカソ礼賛のシリーズなどそっちのけで、建築とデコールそのものがおもしろくてその特徴ばかり追って歩いた。これはいったいどなたのお邸だったのかと改めてパンフレットを見直すと、旧朝香宮邸ということであった。

階下の大広間や食堂はそれぞれ魚などのモチーフの扉やスチームカバー壁、マントルピースなどが面白い。あの戦争の大破壊の時代をよく切り抜けて来たものだ、と私は見る部屋ごとに感嘆した。裏階段までもアールデコである。そこを上りきった所に本など売っていたので、この邸についての写真集を買った。

二階には書齋や宮家の家族の面々の個室がいくつか並び、その一つ一つのデコールがちがっている。部屋部屋の、シャンデリアとはいえない簡単な電灯も凝ったもので、皆デザインが違っていた。庭に面したこれらの快い部屋の外には広い回廊があってバルコンに出入りできる。檜のウェインスコットのあるパントリーの角をまがると若宮の個室があり、その二つを間の部屋がつないでいる。

その一つの部屋に座っていたボランティアの監視の老人に私は朝香宮家のお家柄についてきいてみた。

『明治天皇の九番目の内親王がお嫁にいった先ですよ』とおじいさんは教えてくれた。

それから礼子さんとその老人と私はひとくさり、それぞれ皇室についての含蓄と意見をお話し合った。結論はまあ、日本の皇室は全体的にあまり魅力はないけれど害もない人たちの一門である。天皇陛下などたいへんによくできた方で、あれだけ趣味と学問に没頭している人間は普通人でも立派だということ。しかしいつまでも退位できない天皇もだんだんと白髪がふえる皇太子もお気の毒で、早く皇室典法を改正すべきだというような、ありきたりのことで型がついた。

礼子さんの言によると浩宮さんは英国に留学してなかなかしっかりしているけれども、その下のひとは学友にいわせるとヌーボーとしてたよりないそうである。

とにかく皇室というものに興味はないと思っていても、戦中を知っている私たちの世代は全くの無関心にはなれないのである。

『昔の皇族というものはものすごい暮らしをしたもんだねえ』とおじいさんは言った。たしかにそうである。しかし皇族というものが異常に持ち上げられた明治から終戦までの時代はむしろ異例であって、鎌倉後期から江戸時代を通じての皇族は、実権者たちから利用されるか、形式的にあがめられるだけで、非常に貧乏だったから被護者的に

扱われて何の権威もなかった。今の皇室はたいへんなお金持ちだけれども、天皇陛下など非常に質素だということで、それにくわえて陛下が趣味と学問に没頭していらっしゃることに好感もてる。よく知らないが、贅沢をしてひんしゆくを買っている皇族などいないのではないか。

この端正な豪邸は朝香宮が1920年から25年までのアールデコ全盛時代、ヨーロッパ滞在中にすっかり魅せられ、帰朝してから設計させたものであることが買った本でわかった。家の外観はどうであれ、実際にもものすごい贅沢をしたのかどうかはわからない。それよりも1930年に建ったこの家がよく戦禍をまぬがれて残ってくれたものだと改めて感動を覚えた。

今は東京都の管理下にあるから相当の出費で修復したのだろうが、よけいな手をいれなかったのがいい。そっけないくらいあっさりとして、元の形にできる所だけ復元し、少数のオリジナルな家具を置いただけで、あとは美術館にふさわしい建物になっている。アメリカでも純粋なアールデコの建物はあまり残っていないけれど、これほど品よく地味におさえられたインテリアも少ないのでよけいに嬉しかった。

私も富の不均等な分配には肯定できかねるけれど、こういう建物、それからもっと豪華なタジマホールやヴェルサイユやエルミタージュや紫禁城や万里長城など平凡でない構築物は、多数の人々を犠牲にして権力によって作られたものながら、今日まで残っているという事態によって偉業だと思われる。すばらしい物が創造されるために多数の人々が苦しまなければならなかったのは残念だが、富や権力が均等に分配され、国民がみな満足する世界では、ろくなものは建ちはしないのである。特に現在の社会主義共産主義の組織の中では多数の委員全会員を満足させなければならないので、どうしても平凡でみにくい建物が建つことが多い。

音楽でも、委員会で作曲した『黄河協奏曲』というものがフィラオケが初めて中国へ行った年に発表されて演奏されたとき、私は呆れて非常な嫌悪を覚えた。世の中が平等主義の方へ走っても個人の天才や創造力を十分に発揮させる自由な雰囲気と、それを後援できる財力がなければ芸術的に有意義な建物や作品はできっこない。モスクー大学やそれをかたどった上海の大博覧会の建物など、みにくい限りである。

共産主義の中だけでなく、民主主義キャピタリズムの中では個人が壮麗で独創的な建物を建てる能力を持つことは現在まれになっているが、それにかわる企業だとか財団が建てる建物は機能的ではあるが美術品といえるものは多いただろうか。公共の建物でも時にはI.M.ペイのようにすぐれた建築家に委託されて建てられたワシントン美術館の東ウイングやクリーブランドのロックアンドロールホールのような建物もあり、それらが現代の感覚を最高に表現していると思える。百年、二百年たった時、二十世紀を代表する美しい建物だといえる建築物がいくつくらい残るだろうか。どうせこの世は平等ではないのだから、せめて天才のあかしが残るような物を建ててくれれば——例えばイスカーンのイエール大学美術館、キンベル美術館、バングラデッシュの政府の建物（これは何年か前、ダイナーパーティでカーン氏の隣に座った時、ナプキンの上にスケッチして下さった）——それが個人のぜいたくだって大企業の贅沢だって、私にはどう

でもいいことである。こんなことをいうとアインランドの危険な芸術家の自己主張だと思われかねないが、彼女の **objectivism** という生半可な筋の通らない哲学とは全く関係のないことである。

(2014年:

庭園美術館は今休館中で、この秋に再開されるそうである。その頃のことを思い出すためにカタログを探したのだけれども、どこへしまい込んだのか見つからない。数年前にアメリカの雑誌で思いがけず目黒の庭園美術館についての小記事を見つけて、その時カタログを探したと思うが、見つかったかどうか、またそのアメリカ人の珍しい記事が何と言っていたか、全然記憶にない。情けない健忘状態である。そう言えば、ルイスカーン氏がナプキンにバングラデッシュの建物を描いて下さったのは、ちょうどその頃デザインを考えていらっしやった頃か、建物を建て始めてバングラデッシュへ行き来していらした頃か、よく覚えていないけれど、その建物はまだ有名にはなっていなかった。それを大切にしまいこんだのは覚えている。後に息子のナサニエルカーン氏が父親について“**My Architect**”というすばらしい記録映画を作ったときに、最後のあたりにバングラデッシュの美しい建物が出て来たので、一体あのナプキンはどこへ入れたっけ、と探して見たけれど見つからなかった。

いつか全然予期していない時に出て来るだろう。

2014/July/31

昨日、美術館で、今やっている大改築計画の説明会が後援者の為に催された。この紹介はもう一度あったのだけれど私は忙しくて行かなかったのだ。

五年前亡くなった前館長の **Anne d'Harnoncourt** 女史が生前、今世界で一番名高い建築家のひとりである **Frank Gehry** 氏に委託して美術館の百年祭(2029)を目指して計画し始めた。

昨日はまず二つに分けられたグループを現館長 **Timothy F. Rub** 氏と総裁 **Gail Harrity** 女史が先導していくつもの壁写真や精密模型を見せ説明して歩いた。これは一時間以上の **Guided Tour** だった。それから美味しい昼食が出され、出席者からの質問と答弁があった。私が招いた二人の客も非常に興味を持っていろいろな質問をした。私は歩きながら説明を受けている間に総裁にいくつかの質問をしたので食事の場では黙っていた。

百年前にアメリカで一番大規模な美術館として出現したフィラデルフィア美術館が、これまでも老朽を防ぐ為に毎年部分的に改築されていたのだが、今度の計画は、根本的な問題として、自然光線をもっと入れること、美術館の所蔵品は増えるばかりなので展示室をふやすこと。それから今までこの美術館は常に若い世代の教育を実行して来たが、その為のスペースは特別あったわけではなく、普通の講堂を使ったり、展示室の床に子供達を座らせて教えたりしていた。今度の計画では大規模な翼を付け加えて、教室をいくつも作るそうである。

すべての企画が同時に実行されるわけではなく、三期に分かれている。その三期のそれぞれの計画も、実際の広さや必要資金の数値も色々聞いたのだけれども書き留めな

かったから覚えていない。(これはもう二三ヶ月前から新聞の美術記者によって書き立てられていることであるから調べられなくはない)。

私はシニカルに『とにかく何年もかかることだから、完成前には私はもう死んでるでしょうよ』という、総裁がみんなそう言っているのだとおっしゃった。

他の人たちの意見も楽観的ではなく、まず、美術館のメンバーはみんな寄付を要求されるだろう、とささやき合っていたがそれはもちろん覚悟しなければならないだろう。そうして、何年もかかれば費用はどんどん上がって行くだろう。予算が始めの何十倍にもなるのはどの計画でもおなじことである。

しかしうまく行けば、内観も外観も非常に美しい、すばらしい美術館になるだろう。ゲーリー氏はビルバオのグッゲンハイム美術館やオンタリオ美術館、ワルトディズニーコンサートホールなど、世界中に有名な建物をいくつも建てた。彼独特な前衛的なスタイルだが、すべてが成功しているとは言えない。しかし彼はいつもとんでもないねじくれ曲がった建物をデザインするのではなく、既成の建物に合わせ、難しい問題を魔術師のように解決するのが上手な人である。彼の今度のアイデアのすべてがよいとは思えないが、今まで死んでいたスペースを上手に生かしたり、建物天頂のペディメントが一つしか完成していなかったのを、他のペディメントをガラス張りにして光線を入れ、中から外の素晴らしい景色が見えるようにするなど、いい考えだと思う。

南フィラデルフィアの人たちが反対しそうなのは、美術館の東入り口、パークウェイに面した広い階段で、これは『ロッキイ』という映画で南フィラ出身の俳優、シルヴェスタースタローンが駆け上ってから有名になり、観光客がわざわざ見に来る場所である。ゲーリー氏はこの階段を切ってその下にひろい展示室をつくり、大きい窓によって光線を入れるとともに外と内の相互関係を作る事を提案している。これは受け入れられれば第三期に実施される。私はロッキイはどうでもいいが、前階段を含む東側の壮麗な全景が好きなので、それを損ねる事に反対している。しかし新しい展示室は必要であり、自然光線も展示室からの外景もよい事なので、案は多分受け入れられるだろう。

とにかく、昨日の行事はおもしろかった。)

=====

1986年：『MOA』

庭園美術館の話ついでにこの春、母や姉と行った熱海美術館 MOA についていえば、まず驚いた。エジプトの王たちの谷間か、何かの神秘的な宗教的雰囲気をつくりあげるために建てたもの、人を驚かせるために建てたものではないだろうかと思う美術館だった。

ここも庭園美術館とは違った意味で展示品よりは建物や庭を見に行く所だった。そして驚きに行く所だった。此のころ何かというと『日本人はお金持ちね!』という感投詞が口から飛び出るのが、ここがまさにそうだった。

この美術館の所蔵品は、国宝の、尾形光琳の有名な紅白梅図屏風や野々村仁清の藤の花の茶壺、唐時代の樹下美人図や有名な湯女図、外国のものはレンブラントの若いときの自画像やモネーのポプラ並木や真っ黄色な睡蓮図が一枚ずつある。所蔵美術品はわずかに3000点、その中で国宝3点、重要文化財55点、重要美術品46点、というのだが、ほんとうによいものはちらりほらりの印象を受ける。創立者の岡田茂吉という人は大人物でいろんな経験を経て、その有為変転の人生を通して美術を愛し、美術品を集めることに没頭した人だったので、勿論立派なコレクションだし、それが岡田氏の子孫のお蔵に眠るよりも、このような美術館に所蔵されて公開されていることに観衆の一人としておおいに感謝すべきことである。しかし実際の今の美術館が建ったのはわりと最近のことらしく「遅れて来た人たち」の印象を受ける。それにしても、物を入れる器として、これは又なんというぜいたくにして膨大な、よく言えば現代的に壮麗、悪く言えば成金趣味のスペクタクルなのだろう。

第一全域どのくらいのひろさなのか知らないが、広大でしかも自然に囲まれ美しい梅林やつつじ山や紅葉林を擁し、立派な能楽堂や、今度できた光琳の家、豊臣秀吉の聚楽第を擬した黄金の茶室まである。展示室は一階と二階なのだが、そこへ行き着くまで、山の下の方から何階にもわたってエスカレーターが荘重にえんえんと上って行く。それはSF映画の神秘的王国然としている。オーロラの広間などという、人口天上の円形の広間は、虹彩をチカチカさせて電気オルガンをなり響かせ、アメリカの大富豪を埋葬する葬式パーラーかハリウッドのステージショウか、という感じの大広間である。床はピカピカの大理石、歩き出したらすってんころりんとは転ぶのではないのかと危ぶむほど光っている。その階から又エスカレーターで上ると外へ出ることが出来る。石段を少し上るとヘンリームーアの『王と王妃』の立派な彫像を設置した広場があって、これはすばらしい。緑に囲まれ、伊豆の海を一望に見渡す快い小休止の場である。（と言っても、ここまでに美術の展示品はこの一品しかないのだが。）もとへ戻ってまたエレベーターで二階まで上ると、ロビーからも伊豆の海、大島などの美しい眺望がたのしめる。この財団はすぐれた先見の明があって、日本の第一等地を早々と手に入れたのだろう。それは岡田茂吉氏の考えにちがいないが、その恩恵を一般民衆が受けている――それは大賞賛にあたいする。施設としては実にいろんなものが完備している。

しかし黄金の茶室というのは！ 伝統文化を公共の教育のために再現してみせることは立派なことである。しかしその目的で一定額の資金を使う時、再現する物はあらゆる選択が可能はずである。全く自由な選択で日本美術史を縦横に見渡せるのだから、その財団は実にうらやむべき立場にあるわけである。他の誰もやらないことをしてやろうという意味においては秀吉の聚楽第の黄金の茶室はたしかに効果的であったかもしれない。そこではMOAがかりにたとえばオリジナルな黄金の風呂場と廁を作らせたよりも、歴史的文化的に秀吉の栄耀栄華を再現するのは教育的である。けれどもその選択に少し頭をかしげさせられるのである。なるほど秀吉の趣味とはこういう物だったのだなあ、という思いがそのままなるほどMOAの趣味もこうなんだなあという感慨につながるわけである。その費用で美術品をもっと購入した方がよかったのでは？

この入場料は1300円で他の美術館に比べると大分高い。これは美術品を見るためよりも何億もかかった建物の中に入れてもらうためのほんとうの入場料である。常設所蔵品を見せるための金額ではない。美術展示室は九つしかなく、十番目の展示室は視聴覚室である。

私たちが行った時は徳川博物館の所蔵品を展示していた。以前あちこちで見た物が多くて少しがっかりした。もちろん美術品は何度見てもいい物だが、美術工芸品が多かった。それはそれ、MOAのような所では他から持って来る移動特別美術展がぜったい必要である。皆が建物を一応見てしまったら、1300円という入場料は高いと感じるだろう。展覧会もよほど工夫しなければ他のもっと便利で近く安く見られるものを見に行くだろう。何べんも行く所ではないのである。人工の神秘的な雰囲気も壮大な建物も長い長いエスカレーターも、みごとなつつじの植え込みも、一度驚けばすんでしまう。桂離宮とか姫路城のように味わいの増すものではないのである。入場料をもっと下げるか、所蔵美術品をもっとふやせばその感はやわらげられるだろう。おどろくほどふんだんに濫費されているスペースも、たしか美術品を上手に展示すれば、もったいぶったSF 宗教的雰囲気は消えて真正の美術館になり、1300円も安くなるだろう。そのためにはいい品を購入して所蔵品を拡大することである。

もういい物はだんだん手に入らなくなっているし、たまに売りに出るとすごく高い。そのためには現在のコレクターに所蔵美術品を寄付させることが一番いいと思うけれども、コレクターはやはり寄付するなら自分の名前にハクのつく所、東博とか京博をねらうだろう。そこが美術館の腕の見せ所である。メトロポリタンだってワシントンのナショナルギャラリーだって、一個人のコレクションから始めたのである。もうすでに所蔵品をうなるほど持っていて、お蔵に入れておくしかない所に寄付するよりも、何何コレクションと名付けられて常設展に堂々と出される所、しかもMOAみたいな容れ物の立派な所がいいではないか、と説いてまわる人材が必要である。

コレクターの間にもひっそりと名前をかくしたい地味で謙虚な人と、自己顕示欲の強い人といろいろいるだろうが、後者だとこのMOAの容れ物に不満はないはずである。一石二鳥ではないだろうか。

(こんなことを言ってしまうと寄付者が怒って授与しなくなるかもしれないけど。)

立派な容れ物は内容さえそれにともなえば世界一流になる可能性を十分持っているのだから、これから大いにハッスルして美術品を集めてもらいたい。外国へ行って頼んでもいいのである。それとも大企業に誰かの有名なコレクションを買わせて、大企業にも個人コレクターにも花を持たせるといのはどうだろうか。とにかくMOAだと外国のコレクターでも容れ物や地理的物的条件に不足はあるまいと思うのだが。

最近何か美術品の売買についてスキャンダルがあったけれど、それは美術株の高い現今にはつきものである。

(2014年:

2002年に緑台の姉が亡くなるまで、何年間も姉が、今度どこそこにまた美術館が建った、と聞いて知らせてくれた。そのおかげで私は日本へ行く度にずいぶんいろん

な所で既存の美術館と新しい館を見に行っただけで、ところがやはり『遅れて来た人』で、建物は実に立派で堂々としている、とか、モダンで眼を驚かせる建築だ、といえるのに、内容が実にお粗末、というのが多かった。それは仕方がないだろう。大企業家が一晩で何兆という大富豪になって、さて美術を集めようか、と言い出すのと同じで、高度成長時代に多くの都市が文化的虹彩をそえるために博物館や美術館を建てたのである。そんなにおそくなってやすやすと買える美術品が見つかるものではない。大評判になったゴッホのひまわりの一枚とか、ミレーの「種蒔く人」など（私は甲府までわざわざ見に行った）デカ大きい展示室に評判の作品がひとつだけかかっている、私は内心大笑いしてしまった。

それからだいぶ後になって、そのゴッホを58億出して買った人が、自分が死ぬときはそれを持って行く（つまり棺の中へ入れて焼く）と主張していると聞いてあきれ果てたことがある。それはただの噂か、あるいは邪推だったかもしれないと思ったのだが、グーグルの脚注によると、

『この「ひまわり」について、購入者が「死んだら棺おけに一緒に入れて焼いてくれ」という旨の発言がしたとの都市伝説があるが、その発言はゴッホ作「医師ガシエの肖像」を購入した当時の大昭和製紙（現・日本製紙）名誉会長の齊藤了英であり、高額購入されたゴッホ作ということで混同されているものと思われる』そうである。

だから「ひまわり」ではなかったけれどもゴッホの作品[あるいは誰の作品にしても、一応世界で美術作品として認められているもの]を、自分勝手な所有権を主張している人が実際にいるのだと知って驚いている。その後それはどうなったか調べてみると、齊藤氏はその発言を世界中から批判されたそうで当然のことである。彼は後に「この絵に対する情熱を表現した言葉のあや」だと釈明し、死後は日本政府か美術館に寄付すると言ったそうだが、購入後に一般公開することも寄付することもなかった。そうして齋藤の死後、この絵はひそかに売却されたあと、しばらく行方不明となっていたが、1997年にロンドン／ニューヨークのサザビーズが齋藤家のために、非公開でオーストリア出身のアメリカの投資家に売却し、2007年一月に、その人も破産して、又サザビーズがこの絵を引き取ったということである。まあ、ひまわりとは関係ないが、有名な高価な絵にはいろいろなドラマが付いて回るものである。[この情報は、グーグルが瀬木慎一の「破産で再登場した「ガシエ」 - 正常と思えぬ名画取引」 - 2007年3月14日、朝日新聞から採集したもの]

ミレーについては、今グーグルで調べてみると、あれから山梨県美術館は頑張ってミレーとバルビゾン派の絵を集めているそうで喜ばしいことだと思う。ほんとうにちらりほらりと有名画家のものを一つだけ持っているよりも、一人の画家か、特別の派の作品に集中した方が特色を出せていいにきまっている。これからも頑張って下さい、と応援したい。

「ひまわり」について調べたら、現在、世界に残っているゴッホのひまわりは始め描かれた七点のうち、一点が1945年の日本、芦屋空襲で消失した後、六点だけである。ひまわりを12本描いたものと15本描いたものがあるが、現在の所有者はア

メリカの個人所蔵が一点（ひまわり3本）、ミュンヘンのノイエピナコテーク（12本）、ロンドンのナショナルギャラリー（15本）、安田火災海上の東郷青児美術館（15本）、アムステルダムゴッホ美術館（15本）、フィラデルフィア美術館の（12本）、だそうで、私は個人所蔵のもの以外、全部一応現場で見ている。それに2012年2月にフィラで45枚だけの小さいゴッホ展があった時、瓶入りのひまわりだけでなく、瓶に入っていないひまわりがあったのを覚えている。その展覧会で一番印象に残ったのはシンシナッテイ美術館の『下生えのなかの二人』と云う、森の木の間を歩いている男女の図と、メトロポリタン美術館からの素晴らしい作品、壺に入っていない、そこに投げ出された枯れかかった二、三本のひまわりだった。）

=====

1986年：『沸騰点』

朝、たまたま出勤時間に外を歩いてみると、のんきな顔をしてぶらぶらしているのは私だけで、電車から降りて来た人々はまじめくさっていっせいにこちらへ歩いて来る。これは反対に向かって歩いて行く者に恐怖を起こさせるに足るものであるが、驚くのはその表情である。日本人は無表情だとか、不可解 (inscrutable) であるとかよく言われる。自分がよく顔の筋肉を動かすものだから、日本人だって無表情じゃない、と思っていたのだが、こう群れをなして一方へ歩いて来る人々をみると、おっそろしくおしなべて無表情である。又その歩く速度が同じで、例えばソビエト赤軍の兵士がクラスナヤ広場で閲兵行進をしているようなそろった歩調である。ただしそのスピードがすごく速い。ビールかなにかの瓶詰め機械がいっせいに動いて人々を次々に送り出すよう。表情もまたビール瓶くらい無表情である。

蛍光灯というものは、物の色を非常に悪く見せるが、電車の中などで無表情に座っている人々の顔を見ると屍のようでしばしば不気味になる。交通機関の中で、お互いに無縁の人たちが無表情に座っているのは世界中どこでも同じだろうと思うのだけれど、アメリカやヨーロッパなどでは、無表情でいる人たちにも、どちらかといえば満足しているようだ、とか、怒っているらしい、とか、何らかの感情がほの見えるのである。日本人の場合それがちっともわからない。たしかに **Inscrutable Orientals** (不可解な東洋人) といわれるだけのことはある。

わからない理由の一つには目をつぶっている人が多いからでもある。目をつぶるということは自分を外界から遮断して「私は外と全然カンケイないよ」と宣言していることで、外を知りたくないとともに、自分の内部を人に知られたいくないということでもある。昔は感情を抑える事を徳とされたのだから、そのなごりがあるとしても、もう今では感情の抑圧はあまり見あたらないのではないか。新聞雑誌の投書欄を見ると日本人は言いたいことは全部吐き出しているように見える。ただ、長年あまりにも無表情を強いられたために、何世紀かの間にそれが習性となり、生理的物理的に顔の筋肉の不

活動という結果になったのかも知れない。しかし高齢者は仕方がないとして、若い人たちが死体とあまり変わらない顔をしているのは残念である。

このような無表情はたんに日本人が分別くさいのかも知れない。この表情は仕事場に持ち込まれていて、日本では誰もが自分の仕事をまじめにしているかのように見える。心の中では何を思っているのか知らないが、無表情だということはしばしば彼をまじめに見せる。まじめどころかクソがつくくらいである。特に郵便局とか市役所区役所とかいう所へ行くと、対応が徹底してクソマジメである。一人一人がその部屋の運命を背に負っている様子である。中にはもったいぶっている人もいるし、いそいそとしてとても感じのいい人もいる。自分の仕事にまじめで生き甲斐を感じている人は好印象を与えるものだ。

いつだったか日本のどこかの駅で駅員さんが壁のスイッチボックスらしい物をていねいに拭いているのを見て、ひどく感動したことがあった。類似した風景には二三度驚かされている。一度は背広を着た本屋の主人が、自分の店の前をきれいに掃いているのを見たとき、もう一度はたまたま私を案内してくれた若い管理職の人が、客室のテーブルが汚れていたのを、ぞうきんを持って来てていねいに拭いた時。とくにオフィスの場合、お掃除のおばさんがいるのだし、この頃の若者はしなくてもいいことはしないものなのに、すすんでそれをしている。その行為にわざとらしさは少しもなく、仕事に没頭している風だった。日本人はまだ自分の仕事を愛し、自分の仕事に誇りを持っているのだなあ、としみじみ嬉しく思った。

それはアメリカの駅やデパートやタクシーや店であまりにも仏頂面をしている人が多いから、こんなにびっくりするのである。ぶっちょ面をした人たちはあきらかに自分の仕事に誇りを持っていない。自分の仕事に意義を感じていたら、いくら給料や待遇に不満があったとしても、もう少し当たり前の顔をして対応してもよいはずだ。

駅員さんや駅のお掃除のおばさんがどのくらいの給料をもらっているのか、又自分の仕事に満足しているかどうか知らないけれども、とにかく彼らは自分の持ち場の仕事をちゃんとしているらしいのを感じる。そしてその無表情な顔には怒りはないのである。

昔に比べて此のごろ店やデパートの対応が悪いという評判をきいたことがあるけれど、私など店員が売っても売らなくてもあまり変わりはないさそうなのに、いそいそと寄って来て丁寧に対応してくれると感謝さえしたくなる。アメリカで対応があまりお粗末になっているからだ。たしかに此のごろの日本の店員にはブッキラボーなものもいるし、こちらに買う気がないと見ると急に笑顔をひっこめて他の人の方へ行ってしまう店員もいる。しかし、そんな豹変に呆れても、その店員は次の客に笑顔を見せることはたしかで、すくなくともアメリカのある人たちみたいにいつも怒っていたり、知らん顔をしたりはしない。日本人の知らん顔は無表情だからほんとうの知らん顔だけれども、アメリカ人のシラン顔は怒った顔になる。そういう時、無表情であることは損なのか、トクなのかわからない。少なくとも人に無用の不快感や心配を与えないだけでも徳としなければならぬだろう。

戦後から今日までの経済発展をつぶさに見てはいないから、人々の社会心理に経済がどんな推移や経過をもたらしたか知らないが、日本の町では一人でブツブツ言ったり大声でわめいたりする人を見かけない。アメリカの町ではこの十五、六年、理由もなく大声でワメキ散らす人がとみに多くなって来た。酔っている人も中にはいるけれど、多くのしらふで怒り狂っている人も多いのである。日本でそんなことをしているのは選挙演説をしている人くらいなものである。アメリカでどなっている少し気のヘンな人には男も女もいるが、大体男が多く、黒人も白人もいるがどちらかというと黒人が多い。街角で一人で怒りたけっているのである。これはどうしても社会が病んでいるとしか思えない。社会が個人を病ませ、怒らせている。彼らは沸騰点に来ているのである。

1960年代の英国の劇作家たちに「怒れる若人」という一群がいた。1965年に、多くの不満や怒りを胸にためていた人々を代表して John Osborne が“Look Back in Anger”という戯曲で初めて舞台上で怒りを投げつけてから、声を大きくして怒りを発散することが流行り始めた。それはベトナム戦争時代の怒りにつながり、国のために戦わせられながら何らの感謝も受けるどころか、裏切り者同然に扱われた帰還兵の怒りにも発展した。沸騰点に達した男たちはしばしば気が変になって、急に木のてっぺんから歩行者を狙撃したり、ハンバーガー店で銃を乱射して人を二十人も殺したりする。

日本にはそういう社会全体を覆う怒りというものがない。自分一人が不遇だと思っている人たちは大勢いるだろうが、層全体とか地域全体とか、人種全体で怒っている人たちは少ない。少数民族に限られているということもあるだろうが。強いて言えば外国人登録の指紋に反対している韓国の人たちがいるけれども、これは怒る方が当たり前で、日本人でない人々を全部犯罪の可能のある人間に見なすほど失礼なことではないか。そんなことをするくらいなら外交官を含めてあらゆる外国人をいっさい国にいれなければいい。日本は世界中でつま弾きされるだろう。

職種全体について言えば、国鉄分割民営化でずいぶん怒っている人たちもいるが、これも過渡期を過ぎれば落ち着くのではないかと思われる。それについて思い出すのは昨年秋の一日である。

ある日私は町に出て（私が町というのは銀座、原宿、新宿、渋谷などの盛り場である）いろんなことをし、上機嫌だった。まず原宿の太田美術館で浮世絵を見、それから日比谷へ出て出光美術館へ行き、有楽町マリオンで展覧会を見、プランタンで生花点を見た。

日比谷で地下鉄から上がって来た時、大勢の人が堀端に赤白の新聞社旗を持ってたむろしていた。中年の女性をつかまえて訊くと、「国際女性マラソン」があるのだそうで、人々はいつ走って来るかわからない選手たちを朝から待っているそうだった。どこから来た人たちかわからないが、この美しい日曜日に皇居の濠端まで出て来て何時間も立っているとご苦労なことである。そうするうちに拡声器の音がどこからか流れて来て、選手たちがまもなくこの界限を通るから車はよけるように、という指示が伝えられた。そこで物見高い私のこととてしばらく待ってみることにした。秋の陽を浴びながら、並

木の下にならんでいる人たちを眺めると家族連れが多く、みな野球見物に来たような、のんきな楽しそうな顔で、何のかかわりもない外国の女性に声援をおくるつもりで待っているのである。やさしいことだなあ、平和だなあ、と私は思った。走る方にしてみれば、誰も応援がないより声をかけてもらう方がよほど嬉しく、元気が出るにちがいない。

選手たちは十分くらいしてやっとぼつりぼつり来始めたが、私は振る旗もないのでだまってその疲れ果てた男か女かわからないような体つきの人たちを十人くらい見送ってから出光へ行った。

マラソン自体はともかく、面白かったのはその午後最後に生花展から出て来た時の対照感だった。生花展は保守的な生花連盟の主催で、古流のわかりやすいものが多くて気に入った。最近アヴァンギャルドの生花展を見に行き行ってびっくり閉口したからである。しかしかにも保守派らしく、その名誉会長に中曽根首相を祭り上げているのに苦笑させられた。ひょっとすると中曽根さんは華道にウンチクが深いのかもかもしれないが、失礼ながら見た所あんまり花とは関係のなさそうな人である。どこの国でもおえらがたを名誉会長に祭り上げるのは同じなんだとおかしかった。政権が変われば見向きもされない事が多いから、日本でも中曽根さんが首相でなければ華道連盟にまで引っぱりだされることはなかったのではないか。女子マラソンと生花展は関係ないが女性が真剣に取り組んでいる仕事ないし趣味として、これくらい対照的なものはなかった。それに一方は何も関係のない一般市民の女性たちがわざわざ応援に出てくれ、他方では一国の首相を担ぎだして色を付けたのが面白かった。

私とその感想にひたりながら外へ出ると、今度は通りをたいへんな行列が通っていた。ものものしい旗を立てて、シャツの上にゼッケンというのか、防弾チョッキみたいな物をつけ、同じ色の鉄かぶとをかぶっている。戦争中の防空演習のとき以来、そんな物々しい恰好をした人々を見たことがない。1968年ごろの安保反対運動は写真でしか見たことがないが、こんな赤や黄や青のきれいな色が付いてはいなかったようだ。何百人かの行列が続々と来るのだが、感心するのはその人々がまちまちでなく、赤、黄、空色のグループに画然と分かれているのである。何百人かの赤いグループが通ったあと、黄色が来て、そのあと青が来る。といった風に、かぶり物とよだれかけの色をコーディネートしたグループが整然とやって来る。そうしていっせいに『何とか何とかハンターイ！』とどなっている。よく聞こえないが旗を翻しているの、よく見ると『国鉄分割民営化反対』とか『打倒中曽根政権』とか書いてある。

この中曽根打倒というのが面白くて私は一人で大笑いしてしまった。建物の中では中曽根氏を華道界の巨頭に祭り上げている。外では同じ人をやっつけようというのである。中では平和の象徴であり、外では今にも暴動の原因になりかねない。それも中曽根氏個人の功罰ではなく、彼がたまたま首相の座にいるからほめられたりけなされたりなのである。

それにしてもこの行列。新聞でよく見る千葉労組の人たちらしいが、せっかくの日曜日にこうしてお揃いのきれいなゼッケンと鉄カブトをつけて歩き回っているというのはご苦労なことだ。しかし『打倒ナカソネーッ』と叫んでいる人々も無表情で、よく

『竹ヤー、青竹ッ！』と売りに来るトラックのおっさんの表情と変わらないようだった。大部分の人たちはほんとうに怒って反対しているんじゃないらしいと思った。それでもとにかく闘争は闘争である。日曜日に東京近郊からピクニックがわりに日本の中心ともいべき日比谷の濠端まで出て来て、旗を持って外国の女性が走るのを声援するのどかな物好きな人たちとも対照的である。しかし両方が平和あってこそその現象であることに変わらない。日本はこの上ない平和ないい国なのである。私は嬉しくて又笑ってしまった。

それからしばらくして国鉄労組はストに入り、全国の旅行者や通勤者に相当の迷惑をかけた。そればかりか、どこかで線路爆破事件を起こして、何人かの人々が罪に問われたようである。これなどほんとうに怒っていたか、相当の悪意を持っていなければできない行為だと思うが、この人たちはどんな顔をしてこの犯罪を犯したのだろうか。やはり無表情だったのだろうか。

無表情でテロ行為をするのは相当難しいのじゃないかと思う。景気付けのためにでも怒った顔をしなければひどいことはできるものではない。人間が沸騰点まで来ているときにほんとうに無表情でいられるものだろうか。いられれば年期のいった相当すごい人だろう。

国鉄分割民営化というのはたしかに全国民にとって生活に直接ひびくたいへんな問題であるが、それでもまだ怒りで頭がヘンになって誰かれかまわずにガナリたてる人は政治候補者以外見たことがない。日本人にそれだけ追いつめられている人はいないのだろう。渋谷の駅や上野公園のあちこちで酔っぱらって寝ている浮浪者風の人とはときどき見るけれども日本の浮浪者は飽食時代のレストランやホテルのぜいたくな残飯で動脈硬化や糖尿になることはあっても飢えることはまずないそうである。町に行く誰彼の区別なくけんかを吹っかけるほどの怒りの原因はなさそうである。

ある年、フィラデルフィアへ帰って来て空港から乗ったタクシーの運転手は初めから終わりまで怒って頭や顔からぼっぼと湯気をたてていた。肥ったイタリー系らしい男で、真っ赤な顔を汗でテラテラ光らせながら『どこへ行く？』と訊く。『チャイナタウンじゃあるまいな』という。私が住所をつげるとだまってスーツケースをトランクの中へ放り込んだ。

『それはコンピューターだから投げないでよ！』私はマッキントッシュ ラップトップをかりうじて救い出してそばに置いた。

車が動きだしてからしばらくして訊いた。

『さっき怒ってたみたいだけど、何を怒っていたの？』

『TOO MUCH! TOO MUCH!』と彼はいった、"UP TO MY NECK!" もう我慢ができないんだ、何もかも、という風である。天気は悪いし、蒸し暑いし、このところ、三週間ほど塵芥車のストライキがあって、市中ゴミの山と化した。町中いやな匂いが立ちこめて養蠅場になった。その他もいやなことだらけだ。彼は首をふりながらがなり立てた。はてこの人は「働けど働けど我が暮らし楽にならざり」の人なのかな。改めてタクシーを見ると大きいけれどおんぼろで、ガタが来てる所どころじゃない、地震のような音をた

てるポンコツである。日本では見られないしろものである。しかしこれはフィラでは珍しいケースではない。ふつうのタクシー並みなのである。

『市役所じゃこの財政困難に税金の使い込みをやってその行方がわからないというし、あちこちで人殺しがあるし』運転手はそれだけいうともうしゃべらなかつた。

帰り着くと私はコーポ備え付けの手押し車を持って来て二つのスーツケースとコンピューターを入れてもらい、14ドルのタクシー代に3ドルのチップを添えた。その男はふくれた赤い顔の奥に引っ込んだ薄い水のような目に軽蔑の色をたたえて、『ビッグデイル!』（それっぽっちゃか）と言い放って車のドアまで戻り、もう一度私をにらみつけて『ビッグデイル!』とどなった。20%のチップは普通よろこばれるのに。

私はその男が理由もなしにぼっぽと湯気をたてて怒っているのがおかしくもあり、わかるような気もして『怒っちゃ駄目よ!』と後ろからどなった。

アメリカ人の沸騰点は日本人よりも高いと思わざるを得ない。それに今日本にはぐつぐつ煮えることはあっても、沸騰点に達するほどの怒りの原因はなさそうである。

これを書いてからしばらくしてオクラホマの小さい郵便局で職員が急にオートマチックを乱射して14人を殺し、7人を傷つけ、自殺するという事件が起きた。ここにも静かに煮えたぎった後、ある日突然沸騰点に達したあわれな男がいたのである。

(2014年:

あれから30年近く経てみると、世界で沸騰点に来ている所が非常に多いのに驚く。どこかで沸騰点に達した人間が銃を乱射して人を殺すのは毎日のうようである。ベトナム戦争の時にも例が多かったが、イラクとアフガニスタンの戦争から帰って来た兵隊達がPTSD(心的外傷後ストレス障害)にかかって苦しんだあげく、無宿者になって関係もない人を殺す事はよくある。これらの人たちは皆沸騰点に達している。

連日悪いニュースばかりで世界も沸騰点に達しているのではないかと思う。数日前の7月19日にはマレーシア航空の旅客機がロシアとウクライナの国境あたりでミサイルに撃ち落とされ、298人の乗員全員死亡という悲劇がおこった。アムステルダムからクアラルンプールに向けて飛んでいたのであるが、その空路は非常に民間通行の多い航空路で、飛んでいる飛行機を軍用機とまちがえてミサイルを放つようなことはないはずの空域だということである。

これはロシア側につこうとしているクライナ分離派が、ロシアから提供されたロケット発射装置を使って故意に民間機を襲撃したのだそうだ。その証拠にその後発射装置がロシア側へ戻って行った映像記録があるという。この分離派に入っている連中は元々ロシアから来た人間が多いのだと私のお掃除の女性ハリナ(ウクライナ人)がいつも言っている。そして彼女はいつもプーチンの大悪口をいうのである。プーチンは表面では平和を支持しているようなことを言っているが、元KGBの幹部だった人間だから残忍で謀略にとんだ人間で嘘つきであることはたしかである。

『新聞の報道ではプーチンはロシア人の中ではずいぶん人気があるというじゃないの』と言うと、『いや絶対にそんなことはありません。私はモスクーに友達がいるので電話で話しましたが、みんな恐れているだけです。うかうか批判的なことをいうとすぐにつかまえられますから』とハリナは断言した。

今日は収容された死体がアムステルダムに到着する日なので大勢の人々が花を持って空港で待っているそうである。亡くなった旅客298人の三分の二はオランダ人、37人はオーストラリア人だったそうで、家族や親類、特に子供を失った人々はもちろん、友人も知人も死者の中にいなくても大勢の人々が集まっている。

それらの人々が一番怒っていることは、ロシアもウクライナ分離派も一言の陳謝の言葉を発せず、現場に国際検査チームをいれず、死体の扱いは粗雑なものだったということである。民間機の撃墜だけでなくその後の処置も国際法に反すると言って憤慨している。これは当然である。それにしてもぜんぶ民間乗客で、ロシアにもウクライナにも関係のなさそうな旅客機をなぜ襲撃したのだろうか。飛行機に装備されている“Black Box”飛行の記録(FDR)と航空士の声を記録(CVR)が見つかったので、英国の国際事故原因究明の委員会に送られたそうであるが、Black Box では ミサイルを誰がどこから発射したか、というようなことはわからないのである。

マレーシア航空は、春に原因不明で一機行方不明になったばかりである。その事故は今度の撃墜とは関係ないし、会社の落ち度ではなかったのであるが、数ヶ月間に二度も大事故があるとどうしても悪名を負わされてしまうという不幸な結果になる。財政困難だという航空会社なのにますます旅客は減って今後どういう結果に見舞われるのか、実に気の毒である。会社の責任者たちはきっと怒りが沸騰点に達しているだろう。

又これとは全く別にイスラエルとパレスチナの関係も絶望的な状態に陥っている。パレスチナ側からはミサイル発射でイスラエルを攻撃している。イスラエルの方は軍備も武器もはるかに優れているからパレスチナほどの損害はないのであるが、損害を言い張ってガザを爆撃し、陸上軍隊を送り込んでいる。イスラエルの首相、鷹派のネタニヤフは大の右翼で傲慢な人である。プーチンとよく似た人間である。中東でも両方がガザの問題を政治的に解決する気持ちはなく、両方の怒りが沸騰点に達している。

この問題は、アメリカにいても気の毒で頭が痛くなるが、中東に住んでいたら絶望的にならざるを得ないだろう。特に子供達はほんとうにかわいそうである。そういう子供達が大人になったら、生まれ落ちてから戦争ばかりの土地の人たちだから、沸騰点の低いテロリストになること必定である。)

=====

1986年：『家ダニ進化の大問題』

日本人のさまざまないさい問題を解決する才能に私は毎日感心している。狭いスペースをいかに利用するかとか、肩こり腰痛をマッサージする機械とか、天ぷらの古油

を処分するクスリだとか、冷蔵庫の匂いをなくす薬だとか、アメリカにないアイデア商品はふんだんにある。けれども根本的な所で解決されていなくて、誰もが困っている問題があるのも事実である。

例えば毎年の台風時期に必ず起きる洪水、崖崩れや鉄道や道路の破壊、それから何年も予期されている大地震——これらは天災地変だから手のほどこしようがない、といえばたしかにそうなのだが、予報と避難勧告の他に何かすることはないのであるだろうか。

それから天災でも地変でもないのにあまり何もされていないことがある。家ダニの災害である。

ある日頭の悪いヘアスタイリストに髪を切ってもらっている間、しゃべっていて新しいアパートの湿気という話になった。真新しいカーペットなのになぜか湿けていて、気持ちが悪いので除湿剤を使っていると私は話した。

するとこの若者、

『ダニがいるでしょう』と占い師が見通すような口調でいった。

『ダニなんていないようだけど。』

『いや、出て来ますよ。僕も新しいマンションに入った時、ダニがわいて困りましたよ。』

『それは畳だからでしょう。畳はダニが湧くというから。私の所はカーペットの下はコンクリートと板だからダニなんかわくことはないと思うけど。』

『いや、それは湧きますよ。新しい所だとぜったいにダニがわきます。』

この若い男は何でも断言する癖があって、今までも何遍かいろんな予言をこうむったが、この時も、三軒茶屋の教会のアパートにおそからずダニが出ることを請け合ってくれた。

私はそれからなんとなく、あちこち痒いような気がして困った。が、別にかみ痕も見つからず、虫がいる様子もない。もしこれが日本間のアパートだったら、たしかにもうダニが出て来てもいい頃らしいのである。私はダニ恐怖症になって、方々でその話をした。するとマリニ夫人は大昔芋屋の新しい借家にいた頃、アメリカで一夏過ごしてから帰ってみると、虫がいっぱい出て来て、一歳未満の長男が方々刺されたという話をした。それを退治する方法として燻蒸ということをしたそうである。彼女はプロを雇ったのだそうだ。

私の姪もこの前50日間ヨーロッパへ演奏旅行へ行く前に、マーケットで売っている小さい燻蒸の薬で予防処置をしておいたという。なるほど、そういう方法もあるのか、と思って、私もすぐに燻蒸の薬を買って来た。

その燻蒸ですぐに虫が退治できるかどうか、アパートの管理事務所の若い技師さんにきいてみると、彼は怪訝な顔をしたあとでやっと私の話がわかって、

『虫なんていませんよ。燻蒸なんかする必要はありません。』と保証してくれた。そしたら痒いのがピタリと止まったから不思議である。

それにしても、日本の畳にしばしば家ダニがわくというのはよく聞く話で誰もおどろかない。姉なども畳のあちこちにプツリと刺してシューッとやる殺虫剤を用意しているようである。私はそんなものを見て奇異の感にうたれる。畳屋で作られる畳の芯になる藁のなかに卵がいるのだということをきいたが、そんなら何故その時点で十分殺虫しないのだろうか。第一なぜ藁を使うのだろうか。このプラスチック時代に藁にかわるそっくりの材料がないものだろうか。

畳そのものは、平安の昔から日本人が作り使っている物で、日本生活の源泉、心のふるさとだから、なくてはならないものである。私もきれいな青畳や、ふすまとかすだれとかを見るのは大好きだし、畳の香りも懐かしい物の一つだとばかり思っていた。すると、今度長期間日本で生活してみて、私は畳を見るのは好きだけでもその上に寝なくても一向かまわないし、新しくても、古くても、畳の上を素足で歩くのは絶対にいやだ、という自分の性癖を発見した。これは私が素足きらいで、寄せ木床であろうが、カーペットであろうが、タイルであろうが、素足で歩くのがきらいなので、畳も冤罪をこうむっているわけだけれども、特に畳の上を素足で歩くのがきらいなのである。古い畳はもとより新しい畳も素足ではいやなのだ。足袋か木綿のソックスをはいて歩くのが一番いい。これは畳の上にじかに座ることや布団なしに寝転がるのがきらいなのと同じである。

そうして意外なことに、今度、真新しい青畳の香りもそんなに好きでないということを発見した。ある時デパートの中をまんぜんと徘徊していると、何だかモーレツに青くさい、いやな匂いがした。なんだか覚えのある匂いだと思って見回すと、たくさんの青々とした藁草の畳表や花むしろがセールで出ているのだった。今考えてみると、安売りに出るくらいだから、質の悪い売れ残り品だったのかもしれないが、その時は、よくまあこの売り場の人のがまんでできるものだ、と逃げ出した。頭痛がしそうに強い匂いだった。

もうひとまわり年を取ったら、又考えが変わって畳ぐらいい心の落ち着くものはないと思うかもしれない。しかし今の所、私は日本からダニを根本的に追いやるには畳、ないしその芯藁を使わないことが解決法なのじゃないかという過激な考えを持っている。藁草は岡山県の大切な産物（すくなくとも昔はそうだった）なのだから、畳を追放しろなどと無責任なことをいうと電車から突き落とされるかも知れない。しかし畳からダニを追放するのは畳そのものを追放しなくてもできそうなことである。なぜそれが根本の所でできないか。これは毎年台風や地震が防げないのと同じなのだろうか。

自然の摂理には虫もいろんな鳥や動物の餌になるため、または何かほかのものの栄養になるために必要なのだけれど、ダニなんて一体何の役にたっているのだろうか。

考えてみるのに、私が小さい頃畳からダニが出て来るなんてことはなかった。何でも昔はよかった、などと老人めいたことをいうつもりは決してないし、昔より今のほうがはるかに便利になっているのだけれど、ダニなんていた覚えはないのである。昔、ノミという虫はときどき出て来て蚤取り粉が撒かれたし、蚊も蠅もふんだんにいた。それ

からシラミという物は髪の毛の中に巣食うもので、小学校の時、私は誰かにシラミを移されて母が苦勞してそれを退治してくれたことがあった。

昔はたしか一年に二度くらい大掃除というのがあって、どこの家でも障子ふすまを取り外し、畳を全部出して、盛大にバタバタやり、上から下まで清掃したものである。その度に誰かが見回りに来て清掃済という証明を台所のどこかにぺたりと貼って行ったような気がする。そうして大掃除の後、お手伝いも入れて一家でする食事はとてもたのしかった。

私は去年から日本にいてあれこれ見ているつもりだが、大掃除などやっている気配はない。みな毎日掃除機を使っているから、とくべつに大掃除などしなくてもいいと思うのだろうか。昔の人は毎日きちんと朝の掃除をした上に大掃除をしたのだった。

江戸時代を研究し始めてから十二月十三日が年中行事の大掃除の日であり、江戸城以下、日本中でバタバタやったことを知った。それは旧の十二月十三日だが、たまたま太陽歴のその日が私の誕生日であることから、自分では大掃除の末裔をもって任じている。そのくせ自分で掃除をするのは大きらいで、しかも汚いのは我慢できないという矛盾した問題をかかえている。幸いアメリカではこの二十年来、人間国宝級の掃除の名人メリーをやとっているからこんなベテランがいてはダニも湧くまいと思う。けれどいくら彼女でも日本の畳に湧くダニは処置なしかもしれない。

今の所日本には燻蒸とか駆虫剤とかがあられるけれど、虫というものはおかしなもので、駆虫剤で根絶したと思ったらそれとまた少し違った種族でその薬に強いムシが出てくるのだそうである。ダニはノミ、シラミ、ハエや蚊を退治した時点でそれらに換わって出て来たのではないだろうか。それに次々に出て来る化学薬品のおかげで、ダニがだんだん強くなり、今にとてつもなく強靱な無敵ダニが進化して日本中にはびこるかもしれない。SF 映画によく出る巨大な蠅や毛虫のようにならないともかぎらない。今のうちになんとか根絶したほうがよいのではないだろうか。

(2014年:

「アメリカの人間で国宝級の掃除の名人」というのはダン二（旦那ナンバーツウ）が命名したのである。ダン二を失って、三年くらいしてから彼の友人だった人がヤモメになって私に求婚した。前から知っている人だったからロマンチックな愛情はないけれど尊敬はしていたから結婚した。メリーは大昔からお掃除してくれていた人だから、新しい家に連れて行った。ダン二は彼女の掃除のやり方にすっかり感心して『メリーは国宝だ、掃除の神様だ』と宣言したものである。しかし私はお花とハズバンドには縁が薄いらしいので、ダン二も三年足らずで亡くなってしまった。メリーも年を取って2000何年かにやめてしまった。

ダニが無敵になったかどうか知らないが、バクテリアが殺菌剤に対してだんだん強くなる事は事実らしい。以前は何でもすぐに抗生物質を飲むように言われたが、今日の医者はそれについて非常に慎重である。私のダン二が既にそれを1970年頃言ってい

た。そうしてどうしても抗生物質が必要ならばその一定の数、処方された20くらいを全部服用しなければかえって害になる、と言っていた。

その通りで、いまでは一度絶滅させていた肺結核や小児麻痺が近年また復活したそうである。)

=====

1986年：『音と壁、ままごとの家』

夜中に隣のアパートから声が聞こえる。何時になってもしゃべっている。高声で笑う。二、三人はたしかにいらしいが、事によると四人いるのかもしれない。そのくらいの騒ぎである。二時頃からシャワーの音がし、その後また誰かがシャワーにかかった。

二人以上の方がこの狭いアパートに眠れるわけではないけれど、女子大生同志のざこねをたのしんでいるのかも知れない。私の学部時代の女子大では卒業までに誰にも課せられた伝統の奇習があった。初代の校長だったミス ピーボデイという人は写真で見るとビクトリア女王に似た、肥って背の低い人だったが、彼女の私室はビクトリア朝趣味の天蓋付きの高いダブルベッドのある部屋で、彼女が大学創立以来住んでいたその部屋がそのまま残っていた。学生たちは卒業前に誰にも知られないようにこっそりそのベッドに一晚寝て来る義務があるのであった。私は卒業間近のころ、三人の仲間とミスピーボデイの歴史的な寝室に忍び込んだ。部屋自体は天井がすてきに高くて大きいけれど、ベッドは昔の家具がそうであるように、丈短くパンのようにふくれている。私たちはその上にイワシのように重なってくすくす笑ったり、もじもじ動いたりして、一晚中ちっとも眠れはしなかったけれど、それが又たのしかった学生時代の思い出として残っている。

だから隣の学生には同情的だけれど、とって朝の三時四時まで騒がれてねむれないのは大迷惑である。それも二度三度のことではない。隣のお嬢さんは大柄で賢そうな顔をした伸びやかな人である。泊まり客が多いのも彼女が大学で人気があるからだろう。話の内容は聞こえないが、うつらうつらの間に何か絶え間なく声がしていると思ったらいきなり高い笑い声が爆発して目が覚めてしまう。いいお嬢さんだがこころで一つ教育してあげなければと、とうとう電話した。

『あの、もう三時ですからもう少し低い声で笑っていただけませんかしら。』

『あ、どうもすみません。』

『ふつうのお話はいいんですけど、笑い声がすごく大きく聞こえて来ますのよ。』

『はい、気をつけます。どうもわざわざありがとうございます。』

きちんと礼を言う所とても感じがよかった。三重県の人だというから、東京みたいなこせこせした所じゃなくて、田舎の大きい家に住んでいて、毎日大声で笑っても他から文句が出るなんてことがないのだろう。

そういえば、アメリカでも極端な例以外はどんな大声で笑っても、ステレオのボリュームを上げて隣から文句が出ることはない。壁も床も厚くできているのだろうか。例外は、大分昔のこと、ダンー（主人ナンバーワン）がオーデイオ狂で、何でも新しい

物好きで、Quadrophonic（4チャンネルというのだろうか？）の大きいスピーカーを広い部屋の四隅にすえつけた時のことである。出て来たばかりのクワドロフォニックのレコードでストラヴィンスキーの『春の祭典』やホルストの『惑星』などいろいろ買って来た。早速土曜日の夕食に何人かの友達を招いて四つのスピーカーの微妙な音の違いをお耳に入れようと、次々にレコードをかけてみせていた。

『少し音が大きすぎやしないか？近所から文句が出るんじゃないか？』と友人がいった。実は私もハラハラしていたのである。

『なあに大丈夫さ。ここは壁が厚くてできているから文句が出たこと一度もない。』彼はいい気になってトレブルをあげ、ベースをあげ、デシマルはさらに高くなった。アパートはたちまち太古の森の巨竜の鳴き声や重い足音で満たされた。

と思う間もなくドアのベルが鳴った。開けてみると知らない中年の男女が立っている。

『私どもはお宅の真上に住んでるんですがね』と夫がいうと妻が口を出した。

『お宅でステレオをならすと壁がふるえるんです。』

『私はいいんですが、妻が頭痛持ちで．．．。』

それ以来主人の4チャンネルは笑い話の種になったけれども、男性の音キチはそういう風に音楽も極端に大きくして聴くのが好きらしいので、夫婦で住居を決める時には壁の厚さをしらべるべきである。アパートの場合は床と天井の厚さも大切である。

その頃いつもあらゆる音楽会で必ずあう変人の独身のお爺さんで、何万枚もレコードを持っている人がいた。アパートだと好きなように音も立てられないからといってフィラ市の郊外の森の中に大きい一軒家を建てた。きいてみると別に人から苦情が出たわけでもないのだ。それだけ人の思わくを押し量って、文句の出ぬ先に森の中へ逃げたおじいさんは大人である。けれどもそういうこともやはりアメリカのように土地がまだ人に埋め尽くされていない所だけで可能なのである。

そんな経験から私の仮の宿の隣人に対する気遣いは壁の厚さと反比例するので、おそくなればシャワーにもかからず、ラジオの音もさせないようにしている。このアパートがちゃんとできているように見えながら、隣から音が聞こえるのはどこか建築に欠陥があるのだろうか。それともある音だけが特別の浸透性をもっているのだろうか。

そういえば隣の電話やテレビの音はすこしも聞こえない。又、普通の生活音、皿小鉢の音とか冷蔵庫の開け閉めの音なども全然ない。私も自分のラジオの喧噪度をためすために廊下へ出てみたけれど、扉をしめると中の音は少しも漏れないようだ。そのくせある特殊の音、水道、シャワーの音だとか、何か金属性の物がふれあう音はどこからか急に聞こえてくることがある。

それにしても、こんな電話ボックスみたいに小さい部屋がいくつも並んでいる所が修道院のほかに世界のどこにあるだろうか。この特殊性は各部屋に何もかもが一応完備していることで『ままごと』的雰囲気をもさらに高めるようである。

しかしこの『ままと』的雰囲気はここだけではなく、日本生活のあらゆる所で見られる。結局スペースが足りないからだけれども、何もかも小型にできているのである。浴槽、洗面台、洗濯機、冷蔵庫、自動車、机、椅子。一時は日本人は身体が小さいからというおきまりの文句があった。たしかに私などにはアメリカの洗面台は少し高すぎるのである。が、もうそんな言い訳からはみ出るくらい若い日本人の身長体格は伸びている。一方未だに欧米人が日本の家を訪問すると頭を敷居にぶっつけないように注意することが必要である。これはやっぱりスペースの制限が原因であり、経済的な理由から戦後のままと的スケールがそのまま習慣的に持ち越されているのであろう。

今では、経済的な制限が理由にならない場所、つまり大企業の新築高層ビルでは、これが日本？と驚かせるくらい、広々と贅沢な部屋ばかり並んでいる。しかし普通の家や、家具調度や必要品は今までと同じで子供部屋風に小さいのである。このままと風なのは何となく日本人を精神的に成長不全の子供のように見せていて、ずいぶんイメージ上のハンデキャップになっている。

長年アメリカに住んでいてその間に日本はどんどん経済的・政治的に発展しているのに、このイメージのハンデはまだ付いて回るのを私個人として特に感じる。アメリカ人は何となく日本人に対して大人ぶっているのである。日本人に対する態度はどこか子供を扱うとか年少の者、後輩をあつかうような所がある。私が子供っぽいという理由もあるのだろうが。

ロン＝ヤス首脳の状態もきっとそうなのだろうと思う。レーガンという人は誰にも心やすく開けっぴろげであることを誇示する。カリフォルニア的開放性を売り物にして人気を買っているのである。その態度は世界第一強国の第一人者なのだからという、今までの、どの大統領にも見られなかった楽観的な自信と、ごうまん、patronizing (恩着せがましい、愛顧ぶった)ところがある。日本には一目おいてはいるけれど、中曽根氏にはきっと兄貴的、先輩的な態度で接しているに違いない。それをまた中曽根氏は公私混同して、日本の将来は自分がひきうけたつもりでいるに違いない。それを気にしてガチガチいたり肩をはったりすることこそ、コンプレックスの現れなのかもしれないが、やっぱり見ている気持ちがよくない。

気持ちがよろしくなくても、ずいぶん矛盾した言い方かもしれないが、日本へ来ていろんなものを見たり聞いたりすれば、その家の建て方、スペースの使い方、物のサイズ、壁のむこうの住民の習性から、原始人の習性だという horror-vaqui (空間恐怖)の現れのように物をこまごまつめこんだ部屋のようにすまで、どことなく成長不順な子供のように感じることもあるのだから仕方がない。

(2014年：

この三十年間に、日本の家、部屋、家具のサイズはずいぶん変わったようだ。子供のサイズではなく、だんだんゆったり大きくなっている。そうして人間関係も、アメリカ人は日本人を頭から子供扱いにすることなどなくなっている。子供扱いにはしないが、どうも考えていることがわからない、ということはある。しかし日本人はわりとはっきり正直に発言するし、誠実さを持っていると知っていて、日本人にたいして疑惑の心は

あまりないが、中国に対しては露骨である。アメリカは経済的に中国を絶対必要としているので、中国をどこまでも大人（たいじん）として鄭重に扱っている。しかし中国政府の考えていることは信用できない、というのはどどの国もが持っている感情だろう。現今の中国政府は自信たっぷり、中国が唐の時代のように全世界の中心を占め、その文化や経済力がどの国にも優れていた状態に還ることを目的としている。世界一であることを世界中の国に認めさせたいらしい。

私もこちらから見ていて、尖閣諸島のいざこざや、今にも火のつきそうな国交問題が心配でたまらない。[しかしこのブログでは国際間の外交状態を言っているのではなく、生活の場のサイズと国際間の人間態度を言っているのだからそれにとどめよう。]

アメリカ人はもともと中国人を日本人と同じように子供扱いにしたことはないと思う。これはその巨大ですぐれた歴史文化、経済力の可能性などを見れば当然だろう。それに第二次世界大戦では友好国として同じ側で戦ったのだし、歴史上アメリカは一度も中国とほんとうの戦争をしたことがないという理由もある。その人民の数、資源の大きさ、土地の大きさを見れば実力はいったいどれだけあるのだろう、と思わざるを得ない。私も五度目に中国へ行った2010年に、成都で昼食時期に町を歩いていて、群集雑踏の大きさと密度に驚いて恐怖を覚えたものである。「13億5千4百万人も人がいるんだものねえ。それにこの国の土地の大きさと来たら. . . .」と改めて思った。

しかし中国でも国民の高齢化で苦しんでいるという。2030年までには3億五千万人の国民が60歳以上になるそうだ。その人たちの世話は誰がするのか？これは日本でも問題になっているが、中国の高齢人口は桁違いである。中国の伝統としては、子供や孫が老人の世話をすべきだが、一人っ子政策が災いして、年寄りの世話をする人がいない。この政策は1979年からきびしく実施されたようであり、一人以上子供を持つと課税された。しかしその少し前までは先の毛沢東の産児奨励に沿って子供を産むことはよいことだったのである。一人っ子の家庭が規格となったばかりに今後の高齢社会には非常な負担になるわけである。家族は働きにでなければならぬので昼間老人はひとりである。それで老人ホームが必要になって来ているが、政府の老人ホームは非常に整備も質も悪く、入るとすれば個営のホームであるが、それは費用がかかるので誰でも入れるわけではないらしい。その人気も分かれている：一人で家にいても話す人もいない。ホームに入れば友達が出来からいい、という人と、なんでそんな所へ入りたいもんですか、という人たちがいるそうである。高齢化社会に理想的な解決法はない。)

=====

1986年：『ホラーヴァキュイと買い物』

日本人には、何もないがらんとした部屋に、少数の好みの物を控えめに飾るという優れた美的感性があったはずだ。それが、今やそんな簡素に部屋をしつらえて優雅に美術品だけを置けるのは、高級ホテルの特別スイートとか茶室とか、大企業の社長室か大富豪の客間だけに許される贅沢である。

ふつうの人間にはそんな選択はできない。しかし事實はどうかというと、スペースがないのに、なぜか物はどんどんたまるのである。買わなければいいのに買うのである。又、やたらに人から物を贈られる。あげても喜ばれないとわかっているのに人に物を贈るのが日本人である。だから当然増えるわけである。その買ったもの、貰ったものを部屋いっぱい飾り立てる。ホラーヴァキューイ（空間恐怖）の権化である。日本のあちこちの家の中には生活必需品、不必要品、装飾品、美術品が同居してひしめいている。クーラー、扇風機（クーラーがあるのに扇風機があるのはどういうことか？）東北のこけしにチャグチャグ馬、北海道士産のアイヌの人形に熊の彫り物、南部の鉄びんに唐津のおくunchi、徳島の阿波踊り人形に佐渡の鳥追い笠のおけさ人形、茶棚にお茶道具、テレビ、ラジオ、博多人形の芸者、京人形の道成寺とフジ娘、メキシコ土産の偽プレコロンビアン土偶、ハイデルベルグのビールのジョッキ、鎌倉彫の盆にマジョリカ皿、エッフェル塔の模型、フローレンス郊外のエストラカン壺（偽物）に中国の骨細工の船、ステレオにVCRに電気肩たたき、鏡台に九谷焼の花瓶にミシガンとかハーバードと書いた長三角形の大学旗、益子焼の皿類に志野のお茶道具とポットに白樺の木小屋細工、ハワイの籐椅子に藍染めのれん．．．

そういうものが雑然と並んでいる部屋をよく見るのである。私もなかなか物が捨てられなくてしまい込むたちだから、処分できない人の気持ちはよくわかる。外国へ自分で行って買い込んで来た人は、なつかしい思い出の品だからどんなに色さめてもすすけても手放せないのだろう。旅行好きの友達がいると、いろんな所からお土産を買って来てくれるので、お義理にも捨てることができなくて飾っておくのだろう。

ホラーヴァキューイは又それで面白いところもあるので、自分で自分を笑う感覚を持っている人がキッチな物を集めてたのしむとか、芸術家が、人間写生の気持ちでいろいろ物を置いているのは悪くない。けれどもそれに成功するには洒脱な美的感覚が必要である。ふつうの場合何もかもまんぜんとごたごた置いてあるだけでは、くず屋の物置か蚤の市に踏み込んだような気がするだけである。

しかし観光に行つて物を買わずにはいられないというのは日本人に限ったことではなくて、アメリカの小市民などフロリダやカリフォルニア、方々の国立公園に行つて買って来た置物をそこいらに飾っている人もいるようである。そんな人でも隙間もなくごたごた並べたてることがはしないようだ。

十年前初めて中国へ旅行した時はアメリカの公共文化団体で仕事をしている人ばかり、二十人で行つた。私はまだ教えていなくてアメリカ最初の科学博物館であるフランクリン インスタチュートの会員課長をしていた。17日くらいの旅だったと思うが、明日帰国という日に、ニューヨークのバレーの理事である女性が「あちこちで物を買過ぎた、これはとても持って帰れない」といって自分の部屋でガレージセールをしてみんなを呆れさせ、おもしろがらせた。私は北京で中国服を作り翡翠の装身具を買つたのですっかり満足したからセールで何も買わなかった（と思う。）

どんな大きい家を持っている人でも、長年の間には置く所がなくなるというのは万人共通の傾向だけれども、たいていの人ならガラクタは屋根裏の物置に入れるか、捨て

てしまうか、くず屋にやってしまう。車庫をいっぱいにして、引っ越しをするのでもないのに定期的にガレージセールをする人もいる。日本でもこのごろ大分勢いよく捨てる人が出て来たようで、ガレージセールもやるそうである。その癖、こりもせずに買い込むのも日本人である。

どこへ行ってもお土産屋があるというのも世界共通の現象だけれども、日本のようにスペースのないところで、お土産屋があれだけ繁盛しているのは買う人がまだまだいるからである。置き場もないのに買いまくるのは欲求不満の人や、それとは又別に十分成熟していない人間ではないかと思う。しかしそういう自分も昔はあちこちへいくと自分が使えそうな衣類はもちろんのこと、着もしない民族衣装などを買って来た。それから三十人くらいの知人のためにお土産を買う。それも決して高い物ではない。ただし自分がプラグマチストだから美術的な物などあまり買わないで実用品を買う。日本での買い物だと、ろうけつ染めの皮の財布、瑪瑙のブローチやペンダント、デザイナーハンケチ、扇、小物入れ、紙入れ、日本的櫛と鏡のセット、小型裁縫道具、眼鏡ケース、洗面道具袋、民芸ノートブックや電話帳、アドレスブック、スカーフ、日本の割烹着や着物ブラウス。私はそういう安物を実用品だからと思ってせっせと買い込んでいた。

ところが、そういう物は実用品らしくよそおってはいらぬがあまり役に立たないのだ。装身具、ブローチやペンダントなどは、十八金なんて金具のついたものは高いから特別な人以外にお土産として買わない。けれども人は安物はつけないのである。それに個人個人趣味が違うから、たまたま私と同じ趣味を持っている人ならともかく、そうでない人もいる。貰う時も同じで、一生に一二度しかつけたことのないというブローチやペンダントは私の装身具のダンスにもごろごろころがっている。

小物入れというものは実に役に立たない。私はいつだったか伊予絣のすてきな小物入れをたくさん買って来て人にあげたが、あまりに日本的すぎて、誰も使っている様子がなかった。形も模様も色も彼女らの趣味にはあわないのである。

プレゼントにあげるような電話帳や住所録はそんなに大きいものではないから書き入れるスペースは限られている。知人全部は書き入れられないからビジネス用とか、親しい交友関係だけとか、女友達だけ、とか。私も四つ五つ違う電話帳があるが、次第にその区別が怪しくなって結局役に立たなくなった。

洗面道具入れ、眼鏡入れ、財布、ハンケチは誰でもいくつも持っているから、もう一つあげてもありがたがられもしないのである。私は日本に来る時、いつもユナイテッド航空が飛行機の中で洗面道具入れをくれるから、いやというほどたまっている。

日本趣味の小さい置物は大きい京人形やお茶道具や立派な焼き物とかは別として[そんな高価な物は普通の人にはお土産にあげない]浅草などで買うような小さい置物や飾り物は子供だましみたいなものである。それでも色々見ると可愛らしくて日本的なのでつい買いたくなり、買っても自分ではごたごた飾るのはきらいだから人にあげたくなる。貰った人こそ大迷惑であろう。購買欲というのは人間のひとつの本能だと思うが、もともとある本能ではなくて文明病のひとつである。何か欲求不満があって、それを満たす方法だから、自然の本能ではない。所有慾とはまた違うのである。つまらないものを沢

山買っている人にもあげるのもコンプレックスの現れに違いない。安物を上げて人の関心や感謝が得られるわけではないが、なんとなくあげたくなるのは、まず自分の購買欲をみたすためであり、自己満足のためである。御礼を言ってもらいたいとはさらさら思わないけれど、ほんの小さい負債を負わせる気持ちはどこかにあるのではないか。貰った方でそんな場塞ぎのガラクタを捨ててしまわないで飾っておいたりするのは、よほどのお人好しか純情な人だと思う。

(2014年:

この10年くらい、私は滅多にお土産を買わなくなった。この年になってやっと大人になったのである。ときどきどうしても何かお印にあげたい、と思って買うことがあるが、それもほんのおしるしである。若い人ならともかく、熟年の人たちはもう欲しいもの必要な物はなくなっているからお土産を期待していないし上げたら迷惑なだけだろう。友達もそれを心得ていて、『帰ってきたわよーっ!』と電話して来るが、いっしょに食事に出て旅の話をするだけである。

日本でも最近ホラーヴァキューイ状態はなくなっているようだ。近年そんな部屋は見かけない。

しかし大人でも老人でも購買欲はときどき突発的に出て来る。五年前に南アフリカへ行った。長い間、アパルトヘイトに支配されている間は旅行を避けていた所だから、この主要な国をまだ見ていなかった。ネルソン マンデラ氏が27年間幽閉されたロペン島のポルスモア刑務所やアフリカ最南端の岬が見たかったから行ったのだ。だから何も買うつもりはなかった。

ある日あちこち歩いてケープタウンの港で船を待っている時相当時間があって、みんな近くの大きい建物へ店の見物に出かけた。一人でぶらぶら廊下を歩いていると大きいポスターが眼にとまった。美しいタンゼナイトの広告が私の足を止めてしまった。以前タンゼニアへ行った時にはこの特産品に見向きもしなかったのであるが、今度はなぜかそのポスターに引き寄せられた。間もなくタンゼナイトの発掘は止められるのだという。母が紫色の美しいアレキサンドライトの指輪を持っていて、それも珍しい宝石であった。私がアメリカへ留学することになった時、それをあげようと言ってくれたのだが、私はことわった。母が亡くなってからそれは多分長女である山口の姉の所へ行ったのだろう。とにかく、私はポスターを出している宝石屋へ行って見ることにした。それが間違いだった。

今では興味がないのだが、私は若い時色のついた宝石が好きで、サファイア、エメラルド、ルビーなど、インドやネパールへ行ったときにいろいろ買っていた。準宝石もいろいろ、エジプトへ行ったときには準宝石だがラピスラジュリーのブローチと指輪を買ったし、ロシアではガーネットやトパーズ。

2003年に何度目かにバンコックへ行った時、全然買うつもりはなかったのに、友達に誘われて店に入ってみると、実に巧者なセールスの女性が私のダイアとサファイアの指輪を見て、これにとってもあう美しいブローチがあるから、と持って持ち出して来

た。それが気にいってうかうかを買ってしまった。そういう経歴があるから宝石屋に顔を出すべきではなかったのだ。しかし時間はあったし、買うつもりはないのだから、と自分に言い聞かせて見始めたのが運のつきである。大体そこに見本に出ていたのは色の薄い、水色の物でジルコンかアクアマリンのようで、興味はなかった。すると店員が持ち出して来たのは紫がかかった濃い青の美しい指輪だった。それは7400ドルで私の持っているどの指輪よりも高い。バンコックで買ったブローチの二倍近い値段である。ちょっと高すぎると思ったが、私はお金は使わなければ寄付してしまうので、えいっ買っちゃえ、と衝動的に買ってしまった。

『もう発掘禁止になりますからね、この指輪は値段が上がるばかりですよ。』と店員は言ったが、私は売るつもりはないから関係ない。店員は税関を通る時の為、といって千ドルくらい引いた領収書を書いてくれた。私はどうも怪しいと思ったが面倒なので何も言わなかった。ところが後で他の店へ行って指輪を見せると高過ぎると言うのである。半分以下の値段でしかるべきだと言ったのだ。私は買った店へ行って指輪を返そうとしたのだが、「一度店から出て行った品物は引き取りません」と言われてすげすげホテルへ帰って来た。

高い指輪を買って購買欲をたしかに満たしたのだが、その指輪はいやな思いをさせられたし、誰に見せるつもりもないから、はめたこともない。一度重要なパーティに出た時はめたとと思うが、そのあとは銀行の金庫に入れてしまってお目にかかっているから、どんな指輪だったかも覚えていない。なんたる馬鹿げたことだろう。それだけでなく、他の指輪も、毎日をはめている物以外、全部金庫の中で眠っているのである。少し前から少しずつ宝石を日本へ持って行って姪たちにあげているが、彼女らも興味がないらしくて、いっこうにありがたがられない。

この間ロンドンのコヴェントガーデンでやったプッチーニの『マノン レスコー』で、マノンと恋人のデグリュウと逃げたのだが、お金がなくなると、兄のレスコーの紹介でパトロンじい、ジェロンテへ走った。彼女はまだデグリュウを愛していたので、何年かするとジェロンテとの生活に飽き飽きして来た。すると妹を哀れんだレスコーがデグリュウにマノンの住所を教えた。二人でいる所をパトロンに見つかってポリスが逮捕にやって来る。デグリュウと兄のレスコーはすぐに逃げようと言うのだが、彼女はさまざまな宝石に執着があって時間を取り、逮捕されてしまう。

私は少女時代にアッベ プレヴォーの小説を読んで感動したので、このオペラ翻案はマスネーのもプッチーニのも大好きである。この場面は普通の伝統的な十八世紀風の演出なら自然に見えるが、ローヤルオペラの二十一世紀風の解釈と舞台装置では、うすっぺらな踊り子衣裳をまとった軽薄なマノンが枕カバーの中に首飾りや腕輪をかき集めて入れるのが不自然に思われた。歌唱と演技は素晴らしかったが、現代風の社会文化的意味を取り入れたオペラ演出にはどこかに無理がでる。

その上、この技術万能時代には宝石など人工的にいくらでも作れるし、ほんものソックリの偽物が行きわたっているから本物の意義も薄くなった。だから宝石などに執着する意味はないのではないだろうか。)

=====

1986年：『買いそこないの土地，建てそこないの家』

この数年間私は日本に来る度に老後に日本に住み着くことを考え、ちょっとしたパニック状態に陥っている。引き上げるといっても生まれた国よりも長く住んだ国からそんなに簡単に動けないし、たいへんな計画と労力と資金と、相当な家具を担ぎ込むスペースが必要なのである。第一に私はどこから始めていいかわからない、いつ行動を起こすべきかもわからない。従って毎年日本に来ると、社会経済学のアンケート係のように家族や友達にたずねる。

『ねえねえ，マンションというものを今年買っておくべきかしら？』

するとたちどころに同じ答えがみんなからかえ返ってくる。

『やめときなさい！』

『帰ってからチンタイ（賃貸）にすればいいのよ。』

『帰ってからもおそくはない。もう値段は上がりきってるんだから。』

『そのお金は利子を取って旅行した方がよっぽどいいじゃないの。』

『賃貸の方がいやになった時さっさと動けるからいいのよ。』

そうして彼ら彼女らはその例をいろいろ教えてくれる。

そう言われてみると私も一応その気になる。でもそう言う人たちはそれぞれ皆、家を持っているのだ。チンタイなんかしている人は一人もいない。

私もたびたびの質問を蒸し返すにはそれだけの理由がある。賃貸となるとほんとうに自分の住処という気がしないだろう。チャージカードや何か作る時、自分の家を持っていないとへんに差別されるということもある。ちょっといい所を借りると家賃が際限もなく上がりはしないか、なぞという取り越し苦労もある。それでまたぞろ考えてしまうのである。

けれども本気で探したわけでもないし、ほんとに欲しいと思う家も見つかっていない。それにもし見つかったとしたら手の出ない値段に違いない。

繰り返し考えることは、過去にいくらでもチャンスがあったのに、なぜ買っておかなかったかということである。まあそれはグチになるから止めておこう。

今度の滞日中もすっかりチンタイということに同意してから、又二度ばかり今にも買いそうになってみんなに呆れられてしまった。

一度は今年の三月末に山口に行った時だった。いいお天気なので母と県庁の先の山際を歩いていると、いろんな建築会社のモデルハウスが一群建っていた。こういう家はモデルとして見せたあとで大分安く売ると聞いたことがある。ちょっと興味を示すと、母が見たければ見て行こうと言った。私もちょっと参考の為にとふと思ったのである。

一番手前の家は、ミサワホームという会社が建てたものだった。此のごろは日本の家の材料も建て方もなかなかよくなっている。それは姉たちの家などで感心したのだが、この家のデザインも気に入った。吹き抜けにした洋風の居間はダイニングルームにもキ

ツチンにも日本間にも続いている。閉め切ろうと思えば日本間の敷居を使ってふすまをたて切ることもできる。そのままだと開放的でひろく使えるのである。

フィラデルフィアの今のコーポマンションも日本に比べれば大きいスケールのダイニングと居間のとなりのベッドルームの一つを、壁をぶちこわして居間に続けてしまったくらいだから、開けっぴろげの間取りが好きである。だからこの家は気に入った。急に興味を持ってその宅地でいろいろ見たところ、此のごろのデザインはこういうのが多くなっていて、狭いながらも昔のように細切れの間取りでなく、居心地のいい家がふえている。又用途をよく考えてあって、一つの大きい部屋を、本棚飾り棚の中しきりで二人用にするなど、息のつまらないスペースと無駄のない工夫があちこちに見える。

私は急に家がほしくなった。一人用の小さい家で、ひろい部屋のほかに寝室が二つほどあり、テラスとガレージのある家がほしかった。ミサワホームの人にちょっと相談すると、話はどんどん進んで、またたく間に私は山口大学の近くにこんどできるという団地の敷地に連れて行かれた。人のいい青年が鼻の頭に汗をかきながら説明したところによると、これは山口でエリート団地になるはずである。その敷地は公園の物だからまだ坪十八、九万で、日本の都市の中では一番安いほうである。東京は去年地価が53%とかはねあがったそうで正気の沙汰とも思えないという。私は東京では庭付きの家なんて買えっこないな、と思った。彼はミサワホームのパンフレットを山ほどくれて、ここの地価はうなぎ昇りこそすれ絶対に下がることはないと言き立てた。そんなことを聞いているうちに、だんだん明日にも土地を買って来年は家を建てて日本に帰って来ようかという気になった。

本気になってパンフレットを見ながら盛んに計画をたてている私を母も長姉も疑わしそうに見ていたが、いつも、まあ好きなようにするがいいというのが彼女たちの態度である。それでも姉は、

『ほんとうにこちらに来て住む気ならいいけれど、住まないんだったらやめたほうがいいでしょう』と一応道理にあったことを言った。

しかし私は道理にあったことを現実的に考えるのは大きらいだから、土地だけでも買っておけば家を建てなければならない立場に追いつめられたときに都合がいいだろう、それまでにはなんとかなるだろう、と今にも書類にハンコを押しかねない勢いであった。

次の日私は女学校の友人で酒屋をしている寿美子さんに会いに行った。かくかくしかじかと説明すると、彼女は頭から反対であった。

『あなたはとてとてもこの町に住める人じゃない。お止めになった方がいいと思いますよ』とはっきり言った。彼女も音楽や美術の好きな人である。歌舞伎も特に好きでそのためにときどき東京や福岡まで出たりする。山口は県庁の所在地で総合大学のあり所だから文化行事は一応あるけれども寿美子さんは何年か住んだ東京の生活が恋しいらしかった。

『買うんなら東京になさった方がいいと思いますよ。だけれどもあなたには賃貸の方がいいんじゃないありませんか。』

又それを言われ、私はちょっと恥ずかしかった。それでも寿美子さんの冷静な忠告のおかげで山口に土地を買うのはやめた。

二度目にのめり込んだきっかけは、愛甲夫妻が八ヶ岳の別荘に招いて下さった時である。四月のある日、御主人が中央高速を飛ばして三人で信州に向かった。太陽が出たり陰ったりする快い日で、道路の両側はみごとな桃とすももの花盛りだった。地平線から幾條ものピンクの帯が両側にひろがって、近くにはピンクや白の花が今を盛りに咲き乱れていた。

始めの日は、ご夫婦がワイン好きなのであちこちでワインを買ったり、途中の名所、恵林寺の庭を見に行ったりした。その日は塩山まで行って温泉ホテルで一晩泊まった。次の朝、清春へ行ってパリのラルーシュをかたどったアトリエや近代美術館、ルオーのチャペルなどを見に行ったり、清里の清泉寮でおひるをたべたりしてからゆっくり八ヶ岳について。

六百坪の敷地に建つ愛甲さんの白い可愛らしい家はたちまち私の気に入ってしまった。何よりも土地そのものが気に入った。雄大な八ヶ岳を背に、裾野が優美に長く広がっている一体に瀟洒な別荘地が開発されているのである。ひとつひとつの敷地は最小三百坪である。晴れていれば東には雪をいただく甲斐の山々が見えるはずである。二三日前の雪の残る庭には白樺や「だけかんば」があざやかな幹を見せ、雪の重みで折れた枝や去年の尾花はまださむざむと残っている。この静寂はまさしく寒冷地のものだから、真夏もさぞ涼しいだろうと思われた。

『涼しいのが何よりも御馳走よ』と照子さんはいった。

夜になると頭のいい彼女は限られた材料で魔術師のように手早くいろいろなものを作った。おいしいタルタルやステーキ、焼きなす、手作り豆腐や納豆やニラの白あえ、などで食事をした。ウィークエンドだけで何もかも切り離して帰るので、冷蔵庫には何も置けず、きっちり何もかも食べて残り物は始末していかなければならない。

『やっぱりここは人のいない間は淋しいですよ。僕でもちょっとこわくなりますね。ときどき東京へ電話していつ来るの、ということになります』と御主人はいった。彼はCDプレイヤーとディスクを沢山持っているのだけれど、東久留米の家では思う存分音が出せないからこちらへ持って来たのだとあって、ジャックダニエルを飲みながらマーラーの『大地の歌』やカラスの歌うカルメンなどを聴いて気持ち良さそうに眠ってしまった。照子さんと私はロフトのツインベッドにゆっくり休んだのである。

次の朝も遊歩道路をたどってみたり、あちこちの新しい分譲地に案内していただいた。別荘地が建つ以前からの家は思いのままの設計で、谷川の危なっかしい傾斜に建っていたり、中世ヨーロッパの城のような橋がかかっていたりした。寮かと思うほど大きい家もあった。買ってしばらく持っているうちに手放したくなったのか、売札を出している家もあった。

『こういう風に個人で売ろうとしてもなかなか売れないらしいですよ』と御主人がいった。

土地価がまだ坪四、五万円だというのを聞いて欲しくなって来た私に、愛甲さんは、『まだまだ大丈夫ですよ。いくらでもありますよ』と言った。

その時点では私はまだそれほどやみくもに欲しいという所までのぼせていなかった。考慮してみようか、というくらいの所だったのだ。

池のあたりや、建築中の家や色々の地形の敷地を見、せせらぎの小径や高原ロッジも見に行った。満天星と書くどうだんの灌木がこのあたりの名物らしくて、あちこちで思いがけない高さに伸びていた。

『ほんとうに満天の星みたいなのよ。六月頃になると一斉にいろいろな花が咲いて、そりゃあきれいな』と照子さんが言った。

私は税金はどのくらいなの、とか事務所に払う維持費は、とかいろいろ聞き始めた。たいしたことはないけれど、やはり寒冷地だから三年ごとにペンキを塗り替えたり、早め早めに修繕しなければならないし、出入りのたびに冷蔵庫をからにしたり、水道や暖房をつないだり、切ったりしなくてはならないし、庭もこまめに世話をしなければならないということだった。しかし事務所でいろんなことをやってくれて、木も何をどこに何本植えてほしいと言っておけば植えてくれるそうである。

『とにかく一年間に家をどれだけ使えるか、ということよね。』と愛子さんは言った。事務所によってパンフレットを貰ってから、愛子さんたちは家を閉めて、小雨の降り出した昼頃 三人は別荘地を離れた。

川上村に北欧の大学を思わせる YMCA の建物を見に行き、又清里によって若い人たちが溢れているレストランで食事した。そのレストランの経営者の運営している村も見せてもらった。帰りのドライブは大月のあたりで渋滞があって、だいぶ時間がかかったのだけれど気にならなかった。その二三日が特別にたのしかったからである。

その次の日から、その楽しい経験が八ヶ岳という土地とむすびついて急に別荘がほしくなった。車を動かすのがあまり好きでない私が、たびたびそんな遠くへドライブし、めんどくさい家の準備や大掃除や買い出しや料理をしなければならない。何ヶ月も娯楽はラジオとレコードと本だけ、たまにロッジでコンサートくらいのことで満足できるだろうか。嵐の夜はどうするか。一人で来ている時に病気になったらどうするか。等々の問題が頭をかすめたが、それはお蔵へいれて楽しいことだけを考えた。

あのあたりに家を建てたら散歩が楽しいだろう。夏の間はいろんな人に来てもらう。家は寒い季節も住めるようにして、春から秋までいて、厳冬の間だけ東京に帰るようにしよう。春はまだ誰もいないだろうから淋しいけれど、家に閉じこもって暖炉を燃やしてホットチョコレートを飲みながら本を読んだり物を書いたり翻訳したりする。犬を飼って朝夕散歩に連れて出る。そんな時は毛皮のジャケットを着てエスキモーの長靴をはいてあったかくして――と、いいことばかりしか考えないのが私の悪い癖でもあり、

いい所でもあるのだが、そのうちにほんとに八ヶ岳に家を持つことが今まで悩んでいたことの解決のように思えて来た。

ともかく土地の安いうちに私でも買えるだけの土地を買う気になって八ヶ岳別荘地の持ち主である西部の分譲地販売部に電話した。話にやって来た気持ちのいい青年は当然のことながら私の購買意をますますかりたてた。私はもう西も東もなく熱くなっている計画した。今ドルが下がっていて、ほんとにばかばかしいけれど、円が下がるといことはまずないだろうから、あきらめて土地だけ買って置く。そしてもう少したって日本に帰る目やすがついたら家を建てて、一年のうち、六ヶ月は八ヶ岳にいるようにする。持ち物の大部分は別荘に置いて、とすっかりいい気持ちになって、姉たちや姪にも今にも買うようなことと言った。私が使わない時にはあなたが使ってもいいし、と姪に言った。清里の村にバレエ教室があったのを思い出して、自分の家で夏の間だけ、英語教室を開いてもいいしと思った。

二三日して、何年も会わない大昔の友達と四人でシャガール展を見に行き、食事をしながら私はその人たちに土地を買って置くことについて意見をきいた。

『それは考えた方がいいと思うわ』と皆、口を揃えて言った。

『一時、みんながあわてて土地を買った時があるのよ。だけれどそこにはまだ家も建たず、別荘も買ったけれど滅多に行かず、遊んでる土地がもったいないから売りましようといってもなかなか売れないし。そこに住んでいないからものすごい税金を取られることになってばかばかしいばかりだったの。』

『それに子供たちが家を受け継ぐ時が来ると相続税が大変なのよ。私は美田を残さないことにしてるの。』

『お金があったらその利子であちこち好きな所へ行く方がよっぽどいいわ。』

これらのことは家族やほかの友達が口を酸っぱくして言ってることだし、私の主人 No.1 も No.2 もそういう考えだった。別荘を持つほど面倒くさいことはない、と言っていつも借りていた。

『だいいち、同じ所ばかりへいくのはあきあきする』と緑台の義兄はいつも言う。おなじことでも違った人たちが繰り返すと信憑性が深まるのである。

ふーん、そう言えば私も行ったことのない所へ行く方が好きねえ、と思う。それに土地家屋は私が死んだ時相続する甥姪たちが困るだろう。

そういういろんなことを考えているうちに私ははっと気がついた。

(東京に住む所も持っていないというのに、別荘なんて何をトボケたことを言ってるんだ!) 考えるとほんとにばかばかしい話である。いくら土地が安いからといって八ヶ岳は東京のかわりになりはしない。

こうして別荘の話は立ち消えになった。でもほんとを言うと、私はすこしばかりまだ八ヶ岳に未練があるのである。

知り合いの編集長さんにその話をすると『君はおっちょこちょいなんだよね』と言われたけれど、まさに私はそそっかしやおっちょこちょいなのである。その度に大騒ぎして人騒がせなことである。

姪夫妻はわざわざ八ヶ岳までその土地を見に行っただが、どこなのか、訊きもしないで行ったので、見つからずに帰って来たという事だ。叔母に似てそそっかしい姪である。

(2014年:

今になるとあの時すっかり気が変になっていたのだ、土地なんか買わなくてよかった、と有り難く思っている。その後何年かして膨らみきった風船がはじけて土地家屋総倒れになって1990年から経済危機が始まったからである。そうしてデフレと失職に代表される日本の景気低迷は十年以上続いた。

ところがアメリカは日本の悪例からすこしも学ぶことなかったのか、同じように土地家屋のバブルがふくれ始めた。そうしてとうとう2007年には住宅バブルは崩壊し、2008年9月には1929年経済大恐慌以来の世界的株価大暴落が起こった。1930年代に匹敵する失業時代が来たのである。

金融そのものは5年目の2013年にようやくもとへ戻って、去年ウォール街や銀行は大豊年だったというが、今年の景気は疑わしい。一般市民はまだまだ失業人が多いし、景気に自信がなくて大きい買い物はまだひかえている。大学の新卒業生はどこでも大きな借金を抱えて途方にくれている。

昨夜、PBS（教育テレビ）で『貧しい子供たち』という、失業者の9歳13歳くらいの子供たちの視点から親の生活や子供の立場を描いた2012年のドキュメンタリーの再放送があった。ほんとに涙が出た。親達はまったく怒りで沸騰点に達しているべきなのに、毎日を何とかなるまま生きている。社会福祉施設によって次から次へとおんぼろ家屋やホテルに移されるので子供は学校へも行けない。『パパが失業したから、貧乏だから』と言ってそれで納得している。一人で鉄道の上を歩いてみたりして遊んでいる。何というやさしい、素直な子供たちだろう。今そんな子供たちが1600万人といるのである。これはアメリカだけではないのだが。この豊かな国で、何という時代だろうと情けなくなり、怒りを覚える。

愛甲照子さんは少女時代私が山口に転校して来た時に仲間に入れてくれた4、5人のグループの一人で、大学を出てから一応のファッションの権威になっていた。大変に面白い、話し上手な人で、グループが東京で集まるといつも仕事の方の面白い話をして笑わせてくれた。しかし彼女もガンで何年か前に亡くなった。その前に八ヶ岳の別荘も売ってしまっていた。彼女がいなければ私も買うことなど考えもしなかっただろう。

酒屋の寿美子さんも同じグループだったが、この人は落ち着いて静かな人で、二三歳年下の美人の妹がいた。その妹さんは私がアメリカに発つ時、私の姉たちとともに、

横浜の港まで送りに来てくれた数少ない友人の一人だったが、この人も若くして亡くなった。ほんとに悲しいことだった。

寿美子さんで面白いのは、彼女は玉三郎の大ファンで、山口から東京までたびたび彼の芝居を見に来たが、歌舞伎座へ行くときにはちゃんと美容院へ云って髪を整え、お化粧をし、いい着物を着て行くのである。それは歌舞伎座へ行くからというのではなく、玉さまを拝見に行くから、ということだった。楽屋へ会いに行くのでもないのに、と、友人達は大笑いだったけれども、私も日本へ行ったとき一二度玉三郎を見に行ってもその気持ちがわからなくもなかった。彼女は私を一度玉三郎の踊りの公演に招いてくれた。どこか戸外でずいぶん遠くから見たのだが、一体どこだったか思い出せない。

それから、清里のラルーシュのことに言及しているが、愛子さん達に案内していただいたときはほんとうにびっくりした。ラルーシュは新宿にもあるらしいけれど、あんな田舎の思いがけない所で、モンパルナスの芸術家のアトリエ宿泊所だった多角形の建物をそっくりかたどった建物が急に目の前に現れて全く驚いた。ここは日本でも画家達が仕事に使い、普通の人も宿泊できる所だという。すぐ近くの小さい白い礼拝堂にルオーの絵窓があるのも有名である。とてもかわいらしい。

いつだかフィラデルフィア美術館で1920-1930年代のパリ、芸術家が大勢集まった輝かしい創造時代に、ラルーシュをアトリエとして使った有名芸術家たちについて講演があった時、この山梨の山の中で見つけた思いがけないラルーシュのことを言うとみんな驚いていた。なぜそんな所に？とみんな聞いたが、私にもなぜとははっきり説明できなかった。(日本人のフランス好きを知らなければ理解できないだろう。)

=====

1985-86年：『歯痛』

日本に来る度に歯が痛くなる。これは何も歯痛と日本が因果関係にあるのではなくて、歯や、もろもろの身体の諸道具が古びてあちこち故障の起こる年齢に達しているからで、どこでも歯痛は時がくれば起こるのだろうが、特に飛行機の旅行が空圧の関係で歯痛をより起こりやすくしているかとも考えられる。その他、今年日本で急に目が見えなくなったとか、腱鞘炎が出て来たとか、飛蚊症が出て来たとか、いくつか突発的に健康に支障が起きて私を周章狼狽させている。これは今まで夏の間だけ日本に来ていることが多かったのに、今度は長期滞在と年齢的健康衰退とちがったからである。それで歯のほうも謀反を起こしておおっぴらに悪くなった。こんなとき、私に日本の保険がないのがどんなに不便であるか、痛感させられている。

二年前の夏に日本へ来る用意をしていた間、歯がときどき痛むようなので、一ヶ月前にチェックアップに行ったばかりだけれど、又行ってみた。ダンーが歯科医だったおかげで私は長年よく世話をしてもらい、少しも異常はなく、六ヶ月ごとに検査に行くという癖もつけていた。けれどその時痛くなったのは年のせいらしい。1974年にダ

シーが亡くなってから見つけた歯科医は、いいけれど大満足というほどではないのだが、そこへ行ってX線を取ってもらったら何も悪くないと言われた。五月の初めだった。一週間すると又痛くなったのでどうしても見てもらいたいと又行った。この時も何も悪くないと言われた。私はおかしいと思ったけれど、何もないというのにこちらがいくら頑張っても仕方がない。痛みは何とか鎮痛剤でおさまったのでそのまま日本へ行った。

その夏、おかしなことにメロンを食べた時に限って歯痛が出て来るのだった。始めの二三回は鎮痛剤をのむとけろりと痛みが止まった。うそのようによくなったので歯科医をせっかく探しかけても安心してやめてしまう。しかしそのうちに鎮痛剤がきかなくなかった。そうして十日ばかりグズグズしていると、今度のメロンは相当はげしかったらしくて（何がはげしいのか知らないが）ちょっとやそつとで痛みが止まりそうもない。歯痛で目がくらみそうであり、どこが痛いのか、耳か、頭か、喉か、あごか、という広域にわたる痛さだった。今まで、もしどこも悪くないのなら日本の歯医者へ行くのは無駄だし、恥ずかしいので本気で探そうともしなかったが、今度こそは歯科医が必要である、と私は観念した。そうして友人の医者を通じて医科歯科大学出のお医者さんに紹介にあずかった。

ダンーが大昔に新しい治療法の映画を東京医科歯科大学へ持って行って講義をしたことがあるので、私には少し懐かしい大学である。ちょうどその教授のスキャンダルが広がっている頃で、よきにつけ悪きにつけニュースになっている時だった。紹介された先生は白髪のなかなかハンサムなおじいさんで、とてもやさしく歯根の治療をしてくださった。主人のよしみで少し治療費を引いて下さったが、歌舞伎座の前という場所が場所だけに、そして保険がないだけに相当高かった。

その九月アメリカへ帰ってから、又次の年六月に日本へ来る前に私の口の中で大改革が起こっていた。今度は歯茎がわるくなったのである。それまでも右奥のブリッジの下の大白歯があまり口の壁に近いので、いろいろトラブルが起き、歯膜学医（ペリオドンティスト）にかかって、壁を少しそぐ手術をしてもらったことがあった。その後もそこはたびたび腫れ上がった。幸いブリッジは永久的にくっついている物ではなく、取りはずしのきく物だからいいけれど、歯と歯茎の間にポケットができてしまって、ものがたまりやすい。これは歯茎の問題なのでふつう行く歯科医にペリオ専門家に紹介していただいた。

この人はフィラ市では一番名高いペリオの医者であった。医者と歯科医ばかりが集まっている建物が町の真ん中であってそこへ行くと皆お互いに専門家を紹介し合うから同じビルの中で便利である。ダンーも亡くなるまでそこで開業していた。

とにかくそのペリオ大先生は珍しくも、いがぐり頭の精悍な人である。南アフリカ出身の白人でペン大の歯科学科でも教えている。物言いはぶっきらぼうだが、人のことを「ダーリング」と呼び、話す時は患者の手をもって撫ぜたりする。気味が悪い。

その日、光線写真を見ながら、『これは抜かなきゃ駄目だな、いつまでも持つてるとトラブルの種になる』と独り言のように言ったかと思うとさっさと抜いてしまった。

そうしてその上をカバーしていたブリッジを二つに切ってしまったのである。私はさすがに夫が作ってくれて長年役に立ったブリッジをことわりもなく切られて悲しかった。それにペリオの先生は行動を起こす前に、紹介してくれた開業医に一応断るのが礼儀なのに、彼の場合何の挨拶もなかった。その次のときは『プロマイドを作ったことがありますか』なぞと言って、スタッフの写真部が来て口の中をあちこちから何十枚というX光線の写真を写した。

その次の時は歯茎の精密検査であった。男女二人の大学院生が入って来て相談しながらあちこちつつ突き回して歯茎をしらべた。二人の意見がくいちがってときどき口論をしている。それが十五分くらい、そのあと先生が入って来ると、

『あなたの口の中のバイキンを全部追放する治療にはいるからね。これから何ヶ月か来てもらいます』という。

『何ヶ月もって、私日本へ行かなくちゃならないんですけど。』

『それはいつのこと？』

『六月ごろです。』

『まあ二ヶ月でなんとかするようにしよう。では助手が費用について話します。』一分間で先生は消えた。かわりに女の子来て座った。

『費用のことですが、今日は150ドルいただきますが、次の時は1000ドルご用意ねがいます』

『1000ドル？』

『はい、そうです。』

『今日は150ドル？』

『そうよ。』

私の口は閉じたままだったが、あいた口がふさがらなかった。

『これがあなたのスケジュールで、六回ほど来ていただきますけれど始め1000ドルで、そのあとは3400ドルです。先払いでおねがいします。』

『全部で4400ドル？』

『そうです。』

『それでどうなるの？』

『菌がなくなります。』

『私の歯茎はそんなに悪いんですか？』

『わるいというんじゃなくて、これから悪くならないための予防をするのです。』

私は150ドル払ってほうほうのていで逃げた。今日までで650ドル。初めのはまあ痛いのをよくしてもらったのだから文句はないけれど、大学院生二人に15分つかれて150ドルというのは納得が行かなかった。大学院生につついてもらうのなら、私はペン大の歯科センターへ行けばただでやってもらえるのだ。そこは学生ではなく、教授が見てくれ、大学の保険がきく。

そこを出て私はいつもの先生の所によって事情をのべた。

『私の口そんなに悪くなってるんでしょうか？予防もそんなに必要なんですか？』

菌を絶滅するなんて、物を食べたり、口を開けて空気を吸えばいくらでもバイキンは入ってくるのではないか。口の中の無菌状態がそんなに続くわけがない。ほんのちょっとした間の保証ではないのか。

ロスマン先生は私の口を見て、そんなに悪くない、と言った。無菌工作については一言もいわず、すぐにほかのペリオの医者に電話してアポを取ってくださった。

その先生の検査と治療は何ということもなく、私は何だかアフリカのおまじない師にかかっているような気がした。大昔からあるデンタルフロスという白い糸を歯の間に通して掃除することや三角の楊枝のような木切れを歯の間に入れて歯茎を刺激するような原始的なことを教わっただけだから。

その年日本からかえると私はせっせと歯医者に通ったのである。日本でしてもらった歯根の治療とそのすぐとなりをやり直すということもあった。

次の年、つまり今度日本へ来てからしばらくは歯科医をさけることができた。しかし年が明けると又歯が悪くなった。一番奥の臼歯に気味の悪い痛みがときどき襲って来るのである。これは又歯根の病気だと私は思った。『死にかけてる神経』なのだろう。一昨年のお世話になった銀座の、歌舞伎座前の歯医者さんへまた行った。先生はX光線写真をとってから、『やはりこれは奥のブリッジをはずして歯根の治療をしなければいけませんね。中がくさっているから、』とのたもうた。『そうして下さい』というのと、ブリッジを取りかけたけれど、去年フィラデルフィアで治療してもらったとき、何かすごい接着剤をつけたらしくて、一カ所だけどうしても取れない所がある。

『無理に取るとこれはこわれてしまう可能性があります』とのことである。『これはブリッジを犠牲にするより仕方ありませんね。』と先生は言う。私はアメリカに電話してブリッジを糊でくっつけた先生にきいてみようかと思ったがめんどくさい。

『こわしてはいけない』というか『こわしてもらいなさい』というだけである。その後どうするか、ということになり、そんなテクニカルな説明は先生同士でないとわからない。それは私が勝手に夜中にアメリカに電話するのだからこちらの先生に出てもらわねばいけぬ。どっちにしても彼にいい解決法があるはずがない。

日本の先生はたびたびアメリカの歯科医の考え方はあまりにも割り切り過ぎている。人間の身体なのだから、なるべく自然にという考えである。だからあちらの歯科医とは意見は合わないだろうというようなことをたびたびおっしゃるが、私のダンーは日本人と同じ考えで『なるべく自然に』を強調して、なんと言っても自分の歯に替わるものはないから、最後まで自分の自然の歯を救うべきだ、という考えだった。だから誰の許可もなしにさっさと私の歯を抜いてしまった南アフリカの歯科医は絶対にゆるせないのである。しかしこの白髪の先生は信用できる。

『先生のお考え通りにしてください』と言った。それなくても歯が痛いときはもうほかのことはどうでもいいという気になっている。そこでこの先生は奥のブリッジを切って臼歯の中の方が腐蝕しかけているのをきれいにつめて下さった。しかしその後そのままでは物がかめぬ。そればかりか、下に隙ができた所は、上歯が下に伸びて来た

り、横の歯が隙間に向かってだんだん倒れて来たりする。それを止めるには差し歯をするよりしかたがない。

それでどうとう何週間か、私は痛い差し歯をしてもうらうために通ったのである。そのことは考えるのも語るのも書くのもいやだからここでやめる。

それは百万円以上かかったのだが、南アフリカのいがぐり坊主先生にバイキン退治をしてもらうよりも信じられる治療だった。

(2014年：

あれから30年近くたつ。その間には又他の歯がわるくなって、両方の奥歯は全部なくなったので、両方をまたげるブリッジを作ってもらった。それはいつだったかはつきりしないが、Tom Therrien という若い優秀なペン大の歯科医だった。下歯はあちこち抜かれたので自分の歯は前の五つだけで、後は取り外しのできる両方にまたがるブリッジである。未だにそのまたがりブリッジを使っている。Therrien 先生はほんとうに人のいい、感じのいい男性で仕事も上手だった。しかし熱心なカトリックの信者で、グアテマラかどこかの貧しい人たちの所で働くのだ、と言って行く前にスペイン語を学ぶ為にフィラのラテン系区域に移ってしまった。奇特的、『国境なき医師団』みたいな方だったが、いらっしやらなくなってほんとうに残念である

その後二三人歯科医を変えた。今の人のすぐ前は女性で頼りない人だった。自分の歯に隣接したブリッジの歯の白いエナメルが欠けたので新しくつけてもらった。一度琺瑯が取れるとまたくっつけるのは難しいので苦労したのだが、それを新しく琺瑯でカバーした彼女は色合わせが下手で、真っ白にしてしまったので全然合わない。文句を言ったのだがやり直すことは出来ないという。だから、うっかり口をあけると、その歯だけが墓場の幽霊のように目立つのである。だから私は口を開けて笑えない。不便なことである。)

=====

1985-86年：『一人でする食事』

一人でする食事はだいたい味気ないと相場が決まっている。大部分の人は、

『一人で食事するなんて、大きらい!』と声を強めて宣言し、折りさえあれば友達と誘い合わせて食事に出るし、女性はいくつになっても男性から食事に誘われればころとよろこぶ。

家族のいる人たちはもちろん皆そろっている夜の食事が一番大事な会話と団らんの機会、一人でも欠けていれば落ち着かないだろう。

昼は外界の人たちとの社交の機会、男性は仕事の仲間や顧客、女性は友人と、子供達は学校で大勢の食事をする事が多い。私のようなおぼんでも時たま、一緒に昼食を食べないかと誘ってくれる奇特的な男性が二、三人いる。それは話友達以上の何者でもない

ので、喜んで承知して、割り勘にするか、向こうが払いたがるときには、何も文句がつけられないようにお返しに昼食に招くようにしている。

それら男女の友人とたまに会って昼食をするのは精神衛生に非常にいいが、朝と晩はおおむねひとりである。今は特殊な状況だからで昼や夜姉達の家へいくこともある。

しかしフィラでは典型的な独り者の食事である。忙しい独身者は食事が速くて10分15分ですませてしまうので、胃ガンになるのも無理はないと思う。

ミシェルは私たち友人で作っている小さいフランス会話グループの先生であり、私の大学の同僚でもあるが、彼女は事務室で、立ったままくしゃくしゃとお昼をすませる。その癖が移って、私も自分一人の事務室で、家からサンドイッチを持って来て立ったままくしゃくしゃとやりはじめた。独り者は忙しくなくても食事が早い。手をかけて御馳走を作って一人でたべるのがたのしみ、などという変わり者がたまにいるが、たいていの独身者は味気ないから早く食べてしまう。

食事はたしかに人間生活のたのしみの一つであるべきなのだが、私などにはこれが一つの日課的義務になって、時間が来たから早くたべて早く次の仕事をしなければならぬ、と急ぐ。これじゃあいけないと思うのだけれどどうしてもそうなる。

日本へ来ると、日本の家庭の食生活が豊かなので驚いてしまう。なかんづく緑台の姉は『友の会』の信奉者だから、栄養に気を配ること薬剤師の調合法のようで、タンパク質を何グラム、含水炭素はいくら、脂肪いくら、と計算して料理する。朝から少量ながら、オムレツとハムか、ソーセージ、チーズ、トマト、レタス、きうり、オレンジ。ときどきは花キャベツかブロッコリ、キャベツきざみ、バターと蜂蜜付きのトースト、レモンかミルクいり紅茶、というふうである。勿論本来からいえばそれは立派な、申し分ない朝食であるけれど、たいていオレンジひとつにコーヒー、でなければシリアルとコーヒーとか、ドーナツ一つとコーヒー、というような不健康な朝食を大急ぎでする私には驚きである。私にはとてもできない。それを姉夫婦と息子のお嫁さんと孫一人（息子は朝早く会社にでかけるので）が、毎朝儀式のようにおこなうのである。色彩の配合もよく考えていて、目もあざやかな芸術的朝食なのである。きれいだから眼でたのしみながら食べているととても三分間ではすませない。私は（時間を取りすぎる）とおなかの中で文句をいう。量は決して大量ではなく、少しずつの皿盛り合わせなので、毎日正直にそれを全部たいらげていても肥らないらしい。

海老名の姉はお料理の勉強をした人だし、義兄が病身だから、よく考えてこれも立派な食事を出す。この人は種類の多いのが大好きでやたらと数多くつくるのである。義兄がだんだん衰えて来たからその為にも心を込めて食事をつくる。それに人間は一日三十二種類の食物を食べなければいけない、と講座からの受け売りを人にも説教する。32種類なんてそんなにいちいち集められるもんですか！と私が抗議すると、

『三十二なんてたいしたことないのよ。塩も砂糖もみそも醤油もみんな数えるのだから』という。なるほど、調味料を全部数えればいいんだな、とわかったが、それでもマーケットへ行って相当の数を買って来なければならない。

この間生卵とインスタントみそスープとたらこと金山寺みそといかの佃煮とやっこ豆腐ととろろ昆布とキムチを買って来て――これは生ものを沢山買うと腐ってしまうかもしれないので、加工したものに集中したのである――並べてみたが、テーブルが小さいので食料の半分は床に置いた箱の上におろされるという待遇を受けた。いずれも一向においしくなかった。

女子大からの韓国人の友達がいて、彼女のおかげでキムチは大好きなのだが、この斬られキムチはすっかり機嫌をそこねていた。

憤慨したのは生炊けのご飯で（これは一合しか入れなかったこちらが悪いのだが）生卵をかけようが、とろろ昆布とカツ節と味の素をかけようが一向やわらかくなくてくれなかった。その時から食事は外ですることにした。

しかし私はあまり食事に関心はないし、一人で食べる時お金や時間をかけないので、ライスカレーという物が非常に簡単で安いことを発見して、それにたびたびお世話になっている。それに私はカレーの味が好きなのである。子供の時、母がときどき鮭のカレーや牛肉のカレー、鮭のシチューを作って下さった。それでカレーやシチューが好きになったのだ。そもそもご飯に何かかけて食べるというのは品の悪い食べ方だと思うけれども子供の時からそれが好きなのである。

（2014年）

ダン一もダン二も客が好きで人をよく招いた。ダン一など、何の予告もなしに一日の最後の患者を夕食に連れてくるのがよくあったので、わたしは何とか料理が出来るようになっていたけれど、決して料理するのが好きなわけではなかった。主人を亡くした時、両度とも大変悲しんで体重が10ポンドくらい減ったけれども、料理をしなくてもよくなったのは非常に嬉しかった。

独り身になってからの35年間、初めは食べるのが嫌いではなかったのだが、最近10年くらい、次第に食物に興味が薄れて来た。長い間体重は100ポンドのあたりをもたついていた。そんなに上がったたり下がったりするのはおかしい、とお医者様にいうと、一、二ポンドの違いは水分だから関係ないと説明して下さった。ところが二年前に急に体重が下がって92ポンドになった。やっぱり少し心配になっていろいろ検査してもらったけれども、診断では、『どこも悪くない。老人になると食欲がなくなって急に体重が減ることがあるが異常ではない。ただ気をつけて上質のタンパク質をよく取るように』ということだった。

食物にあまり興味がなくなったのは私の鼻が利かなくなったからである。人間の食欲は50%以上嗅覚に基づいている。おいしそうな匂いがすれば食べたくなる。香りがなければどんなに立派なお料理でも食欲はわかないのである。私は時間がくれば食事をする、という癖がついているので、欲しくなくてもおいしくなくても何か胃の中に入れるという作業はしている。此のごろとみにエネルギーがなくなって、歩行も速くは出来ないしすぐに疲れるから一日三度食べることは怠らない。友人と一緒に食事をする時以外、別に楽しいともおいしいとも思わないので、30年前のミシエルのまねで昼食は立ったまますることが多い。5分くらいですんでしまう。

けれどもいつか、誰だったか言っていた。『どんなに面倒くさくても、お鍋から直接食べることは絶対にしないつもり。』私もそれはしない。それをするのは、たまに何か作ったけれど今欲しくない。明日の夜にしよう、と思う時、ちょっとお味見をするために鍋から直接二口ほど食べてみる時だけである。

夜はちゃんと座って、お皿やスープ碗を使う。料理もときどき気をつけて栄養のある物を作っている。けれどもほんとうにおいしいと思うことは非常に稀である。そんないい加減な生活をしていても、体重は90ポンドを下ることはないからまあいいだろう。それに私は眼が悪いのと背中が痛い以外は、いつも医者が『少しも悪い所はないよ。立派なもんだ』とポーンと背中を叩いて保証して下さっているのだ。

その医者のことだが、先週おかしなことがあった。水曜日の夜、フィラオケの切符があった。それは五月にボストンへ行った時うっかり予定を調べなかったので 定期コンサートの中に オペラの『サロメ』があるのに気がつかなかったのだ。好きなオペラだから楽しみにしていたのに、うかうかと友人夫妻とボストンへ行くことにしてしまった。切符を誰かに上げようと思ったけれど、ちょうどオケに用事があったので切符売り場へ行って変更できるコンサートを探そうとした。するとシーズンの終わりで、あとは七月のビートルズ記念演奏だけ、と言う。普通ポップは聞かないのだから、此のころオケが 聴衆を広げるためにいろんな企てをしているのだし、ビートルズの歌はとてものいいものがあるから聴いてみようと思ってそれを貰った。六月になって、コンサート前にパトロンのために季節の終わりのリセプションをするから、という招待状が来た。私はどうせホールへ行かなければならないのだから出席を承諾した。

その日 6時半にヴェライゾンホールへ行ってリセプションはどこか聞いてみると、後ろのエレベーターで二階まで行って左へ行って下さい、という。そこへ行くと見知らぬ女性が二三人いて、

『ああ MDVIP の方ですね、よくいらっしゃいました。お名前は?』と聞き、『お名前見つからないけれど、どうぞあちらへ行ってお飲物と軽いお食事をなさって下さい。あとでお話がありますから』という。私は招待に返事をしたのに名前がリストにない、ということはときどきあるので、又か、と思って別に気にしなかった。

テーブルに座っていると一人の女性が来て自己紹介した。そうして『あなたはドクターですね、どこで開業していらっしゃるのですか?』という。私は『いいえ、私は M. D. ではありません。Ph. D. です。ところで MDVIP というのは何ですか?』と聞いた。

彼女の話によると、それは最近医者診察時間がとみに短くなっている。患者はそれを非常に不満に思っているし、医者も時間が足りなくて診断を誤ることがある。その状態を改善する為に何人かの医者が始めたグループで、患者は一年 \$ 2000 払って会員になると、自分の望む医者と心ゆくまで相談できる。この方法を紹介してひろめようとしているのだ、ということだった。彼女もその医者一人だった。

私もかねがね診察時間の現状を批判的に見ているのである。医者は、自分の属する病院の経済的方針で、一人の患者につき 10 分以上の時間をついやさないようにとの指示を受けている。みんなそれに不満で良心が許さないのに、新しくこのような団体ができたのである。

私はそれはとてもいいことだが、去年の九月から友人の医者で紹介で行き始めた方はとても素晴らしい先生で、私に自分の携帯電話番号を下さって、いつでもかけていいよ、とおっしゃった。しかもこの先生は時間をちっとも気になさらない。二ヶ月前に急に珍しい腹痛で困った時、電話すると翌日の朝来るように、ということだった。普通、医者のアポは二ヶ月くらい待たないと取れないのだ。もうすぐ定期検診に行くので、この先生に MDVIP にことをどうお思いになるか、聞いてみようと思っている。

その夜招かれた MDVIP 関係の人たちは リセプションのあと、余興としてビートルマニアのコンサートに招かれているのだった。その後 6 人の医者が MDVIP について説明や経験を話した。丁寧な診察をしたためにガンを早期にみつけたという話がいくつかあった。

話がすんで又みんなが飲み食いを始めた時、私はそこを離れて同じ階のお手洗いにいき、音楽会の席の方に降りようと階段の方へ歩き始めた。するといつも音楽会の度に中継時間にコーヒーに招かれるラウンジの入り口で名前を呼ばれた。

『リセプションに出席なさるとのことだったので待ってたのに来られないから心配していました』という。私は『あら、今リセプションから来た所よ』という、ああ、もう一つの方にいらっしゃったのですね、二人くらいあちらへ行くべき人が間違えてこちらに来ました。』というので呆れてしまった。二つリセプションがあって私は間違った方へ飛び込んだのだ。ばかばかしくてその人も私も大笑いしてしまった。

ビートルズの記念音楽会は誠にお粗末で、カリフォルニアから来たビートルズファンの作曲家指揮者が指揮をしたのだが、編曲がよくなく、オケは練習をしなかったのだろう。がっかりだった。ビートルズの四人：ポール、ジョン、ジョージ、リンゴにそれぞれ少し似た男性が出て来て、ギターを弾きながら歌ったのだが、やたらに音が拡大されていてやかましいばかりだった。せっかく好きな曲も形無しなので私は中憩時間に出てしまった。

しかし私の周りに座っていた人たちは男女二人連ればかりだったが、みんな普通フィラオケの演奏にはあまり来ない人たちで、このプログラムを特別聞きに来たのだということだった。解散してから何年も立ち、その後ジョンもジョージも亡くなったというのに、ビートルズの人気はまだまだ盛んである。オケの聴衆拡張計画は成功していると云える。)

=====